
ラング・ド・シャ

三疊紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラング・ド・シャ

【Nコード】

N6025Y

【作者名】

三畳紀

【あらすじ】

閑古鳥の鳴いている喫茶店ラング・ド・シャを舞台に、ちよつとずれた人たちが織り成すホームドラマ調のコメディ。

靈感ゼロなのに陰陽師の子孫として好奇の眼差しに曝される主人公や吸血鬼の娘を自称する中二病患者のヒロインなど、当人は普通に暮らしているつもりでもどこか変わった登場人物の悲喜こもごもの物語をこらんあれ。

Original blend（前書き）

この物語はタイトルと同名の喫茶店を主な舞台にした日常劇です。血沸き肉踊る戦闘も異形の怪物が起こす怪異も超常的なパニック現象も基本的には発生しません。

作品を盛り上げるエッセンスとしてファンタジー的なキーワードを登場させますが、物語の展開における影響は微々たるものであることをお断りしておきます。

平凡な日常の中で、どこかずれた人たちが紡ぎだす滑稽さを笑っていただければ著者として幸いです。

Original blend

黄昏の儚げな日差しが差し込む部屋に置かれた寝台に、一人の妊婦が上体を起こしている。まだ少女の面影が残った、母親になるにはいささか若過ぎるように思える風貌をした娘だった。アーモンド形のぱつちりと開いた瞳を彼女が横に向けると、寝台の傍らには落ち着いた色合いのスーツを着込んだ三十路前後の青年が控えている。

「ねえ忠将、ただまさ1つお願いを聞いてくれる？」

「聞かせてくれ、お前に頼み事されるなんて滅多にないことだから極力要望には応えるつもりだ」

「わたしね、あなたにお腹の子の父親になってほしいの」

「なっ!？」

妊婦の唐突な申し出に忠将と呼ばれた青年は面食らった様子である。忠将は精悍な面に青天の霹靂といった表情を浮かべていた。しかし忠将は彼女の頼みに単に驚いただけではなく、自分はそれを受け入れる立場にないという自信のなさもあるようだった。

「嫌がるのは当たり前よね、どう取り繕ったってこの子はあなたの子じゃないもの……」

「せめてあと少し、俺たちが出会っていればこんなことには……」

忠将の反応を見て妊婦の顔色が曇ると同時に、忠将の顔にも悔恨の念が浮かぶ。

「そんな風に言わないで、経緯はともかくわたしはこの世界にこの子が現れたことを祝ってあげたいの」

「真実……」

「そしてこの子がわたしのお腹から出てきた時、あなたと一緒に祝ってほしい。だからお願い、わたしと2人でこの子を、蘇芳すおうが生まれてくるのを祝福して」

寝台に座ったまま真実という名の妊婦は真つ直ぐな目で忠将の顔を見上げた。忠将は真実の真摯な眼差しに射竦められたように彼女の顔を凝視していた。

「お前の腹にその子が宿っていることに気付かず、お前とその子の二人から精気を吸っていた間抜けで無神経な吸血鬼の俺と一緒にその子の誕生を喜んでいいのか？」

忠将は真実の顔を見つめたまま、不安げな面持ちで自分にその資格があるのかと彼女に問いかける。

「吸血鬼でも人間でも、本当に無神経なひとだったらこうしてお産を控えたわたしに付き添わないわ。そんなお人好しあなたならきつと蘇芳が生まれてきたことをわたしと一緒に喜んでくれるって信じているの」

「…もちろんだ。俺はお前とお腹の子に返しきれないほどの借りがある。お前が望むのなら、いや大きな借りがあるからこそその子が無事に生まれてくることを俺は強く願っている」

真実が忠将の人柄を信用した返事を述べると、忠将は彼女が寄せてくれた信頼に応えるべく精悍な顔を引き締めて首肯した。真実たち親子に対して背負っている借りは忠将が彼女たちの関係を考える上で大きな懸念材料であったが、それゆえ真実のお腹にいる子どもが無事に生まれてくることを願う理由でもあった。

「よかったね蘇芳、あなたが出てくるのを待っているひとがここにいるんだよ」

「直接会える時を楽しみにしているぞ、蘇芳」

忠将もその出生を待ち望んでいることを胎内の子どもに真実が語りかけながら、蕾が開花するように口元を綻ばせる。真実の優しい笑みに魅入りながら、忠将も彼女の腹の中にいる子どもに語りかけた。

「ふふ、本当にお父さんみたいね。じゃあ蘇芳は吸血鬼の娘ってことになるわね」

「茶化すな。だが本当の父親の身代わりでしかなくても俺はお前だけでなくこの子を、蘇芳を精一杯愛したい。生き血を吸って命を繋ぐ呪われた身に堕ちて、本来持てるはずのない家庭を持てるなんて俺は幸せ者だ」

真実の冷やかしに対して忠将は一瞬顔を顰めるが、やがて望むことさえ出来なかった幸せを掴みかけていることの喜びを感慨深そうな顔で噛み締める。

「きつとお腹の中で蘇芳も、吸血鬼のお父さんよろしくねって言うてるわよ」

「こちらこそよろしくな、蘇芳」

本当に真実の胎内に宿っている命に挨拶をされたような気がして、忠将は未だ見ぬ我が子に返事をする。親子三人で過ごす和やかな時間、忠将も真実も至福のものと感じているようににこやかな顔をしていた。

* * *

「あたしが生まれる直前にお母さんと忠将はそういうやりとりをしたんだって」

「へえ、どんな事情があっても君が生まれてくることを喜ぼうとしたお母さんもすごいけど、その気持ちにちゃんと応えた忠将さんも格好いいね」

喫茶店の一角に一組の十代の少年少女が相對している。アーモンド形の目をした長い髪を緩く編んだ少女が自分の誕生日前夜に母親たちの間で交わされた会話を恍惚とした顔で語ると、彼女と向かい合って座っている少年は彼女に相槌を打つ。

「でしょう？ あたしも忠将みたいなひとと恋がしたいなあ」

「…だったら学校に行けよ、あそこにいる半分は男なんだから君の眼鏡に合う人だって1人くらいいるだろう」

「あたしはバカやってはしゃいでいるような子どもに興味ないの」

「自分だって僕より年下の中学生のくせに」

自分の父親代わりになってくれた男のように頼り甲斐のある年上の男性への憧れを少女は抱くのを、少年はうんざりした顔であげつらう。

「戸籍上は14歳だけど、お母さんがあたしを身籠った時から数えれば17歳になるんだから厳密にはあんたより年上よ」

「はいそーですか」

「その投げ遣りな態度は何よ常葉^{とぎわ}？ 口では適当なこと言ってるけど、ホントは全然あたしの話信じてないでしょう」

常葉と呼んだ少年が自分の発言に対して気のない返事をする、少女は眦を吊り上げて少年の顔を睨む。少女の獲物に飛びかかるうとする猫のような目に気圧されて、常葉は若干顔を強張らせた。

「そんなことないよ。平凡な生い立ちを辿ってきた僕と違って、君の人生は生まれる前からドラマチックだなと感心してるよ」

「陰陽師の子孫のあんたが平凡な訳ないじゃん。あんたが生まれた時に街の上空を龍が横切ったとか、生まれた病院が不思議な光に包まれたとかそういうエピソードの1つや2つあるでしょう？」

「そんなことあるか、僕も兄貴もごく普通に生まれ育ってきたんだ。その過程に幽霊も怪奇現象も吸血鬼も一切関与していない！」

少女に自分の出自をダシにされて揚げ足を取られると、それまで冷淡な対応をしていた常葉は顔を紅潮させて声を荒立てて彼女に反論する。

「つまんないの」漫画や小説じゃ陰陽師はごくミステリアスに描かれているのに、実物はこんなどこにでもいる奴なんて幻滅」

文献や講談の中で都の怪異を超常的な力を駆使して解決する陰陽師の末裔であるにも関わらず、常葉が一切特別な能力を持たないと少女は落胆したように溜息を吐く。

「ご期待に添えなくて残念だけど、君たちを特殊な力で楽しませる義務は僕らにないよ。陰陽師の末裔っただけで、霊感が強いとか超能力が使えると他人から勝手に思い込まれるのはいい迷惑さ」

「常葉はホントに幽霊が見えたり式神を使ったりできないの？」

「いい加減にしろ！ 僕はごく普通の、良識ある人間だ！」

一度は落ち着きを取り戻したかに見えた常葉だったが、少女が懲りずに常葉が陰陽師の子孫に相応しい特別な技能を隠していないかと疑ってくると、再び怒声をあげてしまう。

「…良識ある人間が喫茶店の中騒ぐんじゃねえよ、周りの迷惑だろうが」

「す、すみません来栖^{くるす}さん……」

カウンターの向こうにあるキッチンから低音でドスの利いた声に罵声を張り上げたことを咎められると、常葉は身震いさせてキッチンで食器を拭いている大柄な男に謝罪する。

「周りの迷惑ってあたしたちの他にお客さんいないじゃん？」

「仮に客がいなくても公共の場ではマナーを弁えろって意味だ」

「仮にというか、基本的にこの店お客なんかないじゃないじゃん」

「うるせえ、お前は一言も二言も余計なんだよ蘇芳！」

愉快そうに髪を緩く編んだ少女が強面のキッチンで作業をしている来栖をからかうのを、当事者でない常葉が緊迫した表情で見つめる。10歳前後は年下の少女に手玉に取られて業を煮やした来栖は獣のように猛々しく吼えた。

「おちついてクーくん、子ども相手にムキになるのは大人げないよ？」

「すまん丹、ガキ相手に怒鳴るのは情けないよな」

キッチンの奥で焼き菓子の種をボウルで混ぜていた癖のある髪をした美人が、年下の蘇芳の軽口に本気になってしまった来栖をたしなめる。丹と呼ばれた女性の口調は決して強くはなかったが、来栖は彼女の一声で気を落ち着かせると自分の不甲斐なさを恥じた。

「やーい、まこねえに怒られてやんの」

「あなたも調子に乗り過ぎよ蘇芳。いくら家族同然でもクーくんはあなたよりずっと年上なんだから少しは敬意を持ちなさい」

「はい」

丹は来栖だけでなく年上に対して不遜な態度をとる蘇芳にも非が

あると注意すると、蘇芳は全く反省していない様子で丹に生返事をした。

「生意気な口を利いた罰としてお店の前を掃いてもらおうかしら？
もうそろそろお茶の時間でお客さんも来るでしょうしその前にお
願いね、蘇芳」

「えゝあたし今、学校に行くための相談を常葉に聞いてもらって
るんだけど」

「居候のくせに口答えすんな、さっさとやれ」

寛大な丹であつたが蘇芳のふてぶてしい態度をととう容赦する
する気は失せたらしく、寒風吹き荒ぶ表の掃除を彼女に言いつける。
案の定蘇芳は寒い中外に出ることを拒み、適当な言い訳をして逃れ
ようとするが、来栖が有無を言わさぬ強い態度で早々に言われた仕
事に取り掛かるよう促した。

「一蓮托生よ、あんたも来なさい常葉」

「なんで僕が…え、ちよつと！？　せめてジャケットくらい着せろ
よ！」

「つべこべ言わずに早く外に出る。クーくんたまこねえを本気で怒
らせたら、どんな化物だって一撃で吹き飛ばされちゃうんだから」

これ以上口答えをすると酷い目に遭わされる気配を察して、蘇芳
は常葉を巻き添えにして店の外の掃除をすることを承諾する。空調
の利いた店内では必要ないためにジャケットを抜いで薄手のロンT
一枚だった常葉は防寒のためにせめてジャケットを着せるように訴

えたが、蘇芳は彼の言い分を無視して強引に表に引き立てていった。

「蘇芳は本当に自己中だな、忠将さんが甘やかしたのがいけないんだ」

「そうかしら、ウチの子になってから葵あおいの悪影響を受けたせいだと思うけど？」

無関係な他人を引き込んで店の前の掃除をしている蘇芳を窓越しに見つめながら、来栖が彼女を幼少期に養育していた人物の非を唱えると、丹は蘇芳が我侭な性格になってしまった原因は忠将ではなく自分の妹にあると推測する。

「かもな、今のあいつは中坊の時の葵にそっくりだ」

「まだ葵よりは聞き分けがあると思うよ。蘇芳はいやいやでも掃除や洗濯を頼めばやってくれるけど、葵は絶対にやらなかったから」

「もしかしてあいつなりに他人ひとの家に厄介になっていることに気を遣っているのかもな」

「他人って…わたしたちは法律的にも実質的にも家族でしょう？」

「中坊になって少しは世の中が見えてくるようになると、自分が他のクラスメイトとはかなり異なる経歴を持つていることにも気付くだろう。そして学校の連中だけじゃなくて一緒に同居している家族の中でも自分が何か違っていることも感じているはずだ。だから最近やたらと自分が忠将さんの娘むすめつてことを強調して、戸籍上の親である斎さいさんに余所余所しい態度をとるようになり、ウチに転がり込んできたんだろっな」

自分の妹の中学時代と比べれば蘇芳の方が大人しいと丹は語るが、来栖は彼女の妹と蘇芳の際は身内か他人かという点にあると分析する。そして傍若無人な振る舞いをしている背後には蘇芳の複雑な生い立ちが暗い影を落としていると来栖が察したのを聞いて、丹は秀丽な顔を曇らせる。

「でも、どんな経緯があっても蘇芳は大切なわたしの妹よ」

「それはあいつも分かっているよ、だからお前はどっしり構えてあいつのことを見守ってりゃいい」

「うん……」

例え血の繋がりはなくても蘇芳は家族の一員であると丹が訴える、来栖もそれに首肯して保護者として長い目で妹の面倒を見るように助言した。丹は微笑を浮かべながら来栖の言葉に頷き返す。

「まこねえ、掃除終わったよ」

「終わったって、ほとんどやったのは僕じゃないか」

「家の手伝いをするあたしって偉いね、だから学校なんか行く意味ないわ」

勢いよく扉を押し開けて蘇芳が掃除が終了したことを報告してくるが、実際に作業をしたのは部外者であるはずの常葉らしかつた。しかし常葉の恨み言を黙殺して、蘇芳は家事を手伝う自分を自賛する。

「あんなふざけたことを抜かすガキを野放しにはできないな…見守る、いや監視する必要は充分あるな」

「ええ…蘇芳、いくらウチの仕事を手伝ったって学校に行かない理由にはならないよ！」

来栖は改めて蘇芳に目を行き届かせておく必要性を認識し、丹もそれに同意して不登校を続けている彼女に通学するよう呼びかける。

「そんなあ…せっかく寒い中頑張ったのに」

「ちりとり持ってただけのお前が何を頑張ったって言うんだ！」

蘇芳は口を尖らせて不平を述べるが、常葉が集めたゴミを拾う直前まで店と隣家の間に隠れて冷たい風から身を守ってきた彼女が何を努力したのかと常葉が罵声を発した。

Original blend 了

1、Sugar and spice (前書き)

序章にあたる前回は読んでこの話に興味を持っていたあなた方、
ありがとうございます。コメディーの割に笑いのツボがいまいちな
内容となっていますが、回を重ねていく上で精進していききたいと思
うのでよろしくお付き合いください。

1、Sugar and spice

僕が行き着けの喫茶店は彼の自宅から徒歩5分の距離にある小さな店だ。お客さんと賑わっているはずの午後の時間帯もテーブルには空気が目立ち、座っているお客さんの顔もだいたい同じでお世辞にも流行っているとは言えない。

でもそんな窮状を目の当たりにしても、店のご主人はそんなことどこ吹く風というように相変わらず商売っ気のない営業を続けている。

決して小遣いの金額に恵まれている訳ではない高校生の僕が3日に一度の割合で訪れているのは、ひとえにラング・ド・シャという名前のこの喫茶店への愛着だ。一杯400円のコーヒーを頼んだところで火の車に違いがないラング・ド・シャの経営状態が改善されるとは思えないけど、焼け石に水でもやらないよりはましだとかなけなしの小遣いをやりくりして僕はラング・ド・シャに通っていた。

「えっ、珍しくテーブルが埋まっている!？」

今日も閑古鳥が鳴いている店でゆったりしすぎるほど寛いでコーヒーを飲もうと店の扉を押し開けると、僕は信じられない光景を目の当たりにする。常に半分以上の席が空いているはずのテーブルが全て埋まっていて、僕は初めてラング・ド・シャの店内が狭く感じた。

「珍しくは余計よ、常葉くん」

「すみません丹さん^{まいこ}…でもこんなにお客さんが入っているのを見る

の、常連の僕も初めてですよ？」

「実を言うとね、わたしもこんなに大勢のお客さんのオーダーを捌くのは初めてだからてんてこまいなの」

ラング・ド・シャの女主人をしている丹さんは、前例がないほど店が盛況なせいで対応が苦勞している失態を取り繕うような笑みを浮かべる。

丹さんはもう大学を卒業していたけど、思春期の女の子みたいに恥らう彼女の笑顔に僕は思わず見惚れてしまう。

落ち着いた店構えや安価で素朴な味付けの割に美味しいメニューも僕がラング・ド・シャに愛着を持つ理由だけど、憚らずに言えば丹さんの存在がこの店に入れ込んでいる最大の理由だ。

丹さんと僕は10歳近く歳が離れているけど、そんなことは全然気にならない。むしろ年上だからこそ丹さんからはクラスメイトの女の子たちにはない抱擁感を覚えるし、時折見せる少女のような可憐さが僕の心を驚掴みにしている。

「丹」スコーン焼けたから3番テーブルに持っていくてくれ」

僕が丹さんの笑顔の余韻に浸っている間も、カウンターの奥にあるキッチンでは慌しく調理が勧められていた。丹さんと呼ぶ声と共にカウンターの奥から丸太のような腕が突き出てくるのを見て、僕は我に返る。

「わかった。ところでクーくん、5番のお客様が注文したクリームブリュレは出来た？」

「スコーンを出すまで作業するスペースなかったけど、焼き色をつけるのなんてすぐだから3番テーブルから戻ってきた時には出せるぜ」

「火加減間違えて焦がさないでよね？」

「心配すんなって、最近は滅多にミスらなくなっただろう？」

「そうだね、じゃあブリュレの準備お願いねクーくん」

次に出すオーダーについて協議した後、焼きあがったスコーンを乗せた皿を受け取った丹さんは注文したお客さんのテーブルにそれを運んでいく。

スコーンの皿を出して空いたスペースに足元の冷蔵庫から取り出したブリュレの入ったコcottを置くと、キッチンにいる人物が砂糖を振るったブリュレの表面にバーナーで焼き色をつけはじめた。

適度な間隔と時間で炙られたブリュレの表面が綺麗な飴色になる。焼き色がついたブリュレのコcottを皿に乗せてスプーンを添えると、キッチンで作業している人物がカウンターの前に戻ってきた丹さんに絶妙のタイミングでブリュレの皿を差し出した。

「綺麗な焼き色ね、もうクーくんの方がわたしよりも上手になっちゃったみたい」

「こんなモン慣れればどうってことねえよ」

「初めの頃はこんな難しいこと出来るはずないって言ったのが嘘み

「ただね」

「…うるせえ」

丹さんにブリュレの焼き色を褒められた人物は得意げな顔になったけど、以前はブリュレに焼き色をつけることに苦戦していたことを持ち出されると一瞬で決まりの悪い顔になった。拗ねたようにそっぽを向いた彼に丹さんはいたずらっぽい微笑みを向けると、受け取ったブリュレを注文した客のテーブルに運んでいってしまった。

「おい、いつまでもドアの前でばけつと突っ立ってんじゃねえよ」

「す、すみません来栖さん……」

僕が出入り口の扉の前に立ち尽くしているのに気付くと、作業の手を止めて来栖さんが入店するのかわからないのかをはつきりするように促してきた。僕は撫で肩が更に落ちているのを自覚しながら、おずおずと空いているカウンターの席に座る。

「またいつものコーヒーか？」

180cmを超える長身で肩幅も広く、制服のワイシャツの上からでも全身が筋肉の鎧で覆われていることが覗える来栖さんにカウンターに向こうから目を向けられると、彼に比べて格段に貧相な体格をしている僕は反射的に萎縮してしまう。

「…たまには違うものを注文したほうが、いいですよね？」

「そんなこと俺に訊くな、こっちはお前の注文に応えるだけだ」

遠回しに一番安いメニューであるコーヒーばかり注文していることを責められているような気がして別のメニューを頼むべきか訊ねると、来栖さんは日本人離れた彫りの深い顔の唇をへの字に曲げて自分にそんな命令権はないと返してきた。

「…メニューを見てから考えます、注文決まったら声をかけます」

はつきりと他のものを注文しろと言ってもらった方が気は楽だったが、余計なことを言って来栖さんの機嫌を損ねたくなかったので僕は自分の席の前に置いてあるメニューを手にとって注文を考えるふりをする。

「おう、冷え込んできたし温かいモンをお勧めするぜ」

「…ありがとうございます」

商売人だけあって来栖さんは季節に応じたメニューを勧めてきた。確かに来栖さんが言うとおりのところ朝夕大分冷え込んできて冷たいものを注文する気にはなれなかったけど、肌寒さを感じるのは気温のせいばかりではない気がする。

大柄な体格だけでなく濃い陰影を刻む仏頂面の凄みや威圧的な態度で正直僕は来栖さんが苦手だ。堅気の人間には見えない雰囲気や纏う彼と向き合っているだけで、内臓がきりきりと締め付けられるような気がしてくる。

でもラング・ド・シャは基本的に女主人の丹さんと調理スタッフの来栖さんの2人で切り盛りしていて、店を訪れればほぼ毎回彼とも顔を合わせなければならない。

おまけにどういう経緯があつたのかは分からないけど、聖母のように博愛的な丹さんと仁王のように厳肅な来栖さんは非常に仲睦まじい関係だった。2人が阿吽の呼吸で給仕と配膳を行いつつ、笑顔の絶えない軽妙なやりとりを見せられるとても自分のようなひよっこが割って入れるような仲ではないと痛感させられる。

丹さんへの思慕が報われることはないだろうと充分に理解していたが、僕は未練がましくラング・ド・シャに通つては彼女が鬼神のような偉丈夫来栖と長年連れ添った夫婦のように自然な雰囲気の仕事をしている姿を傍観していた。

丹さんの笑顔に癒される一方で、来栖さんの無言のプレッシャーに曝される時間は飴と鞭を同時に体感できる。僕はひよつとして自分がマゾヒストなんじゃないかと最近疑い始めていた。

「ちょっとクーくんお客さん怖がつてるじゃない。そんな無愛想に接客してちゃ、まこねえにまた怒られるよ?」

財布の中身を考慮しつつメニューに目を馳せていると、若干高いトーンの声が聞こえてくる。横目を向けた先に十代半ば、恐らく中学生の女の子が腰に手を添えて呆れた顔でキッチンにいる来栖さんのことを見上げていた。

女の子は背中に届くくらいの長さの髪を一本の三つ編みにして纏めており、エキゾチックな柄をした長袖のワンピースの上に丹さんと同じデザインのエプロンをかけていた。アーモンド形の目をした活発そうな印象の顔の造作は整っていて、同じクラスにいれば注目を集めるだろう。

「俺は普通に注文を聞いたただけだ。お前こそ手が空いているんなら

フロアでうろちょろしてないで、こっちで洗い物でもしたらどうだ
蘇芳？^{すおつ}」

「さっきのブリュレで一通りオーダーは捌けたから空いている食器
を下げなくちゃ。食器片付けたら上がるから後はよろしくね、クー
くん」

「ちょっと待て、面倒なことを他人に押し付けてばっくれるなよ」

「あたしはボランティアで店の手伝ったのよ、食器を下げるだけで
も感謝してよ」

「おい蘇芳、こら……」

蘇芳と呼ばれた女の子は来栖さんの提言を無視して身を翻すと、
店内を回って空になった食器をトレイに乗せていく。

「来栖さん、あの子なんで店にいるんです？」

ラング・ド・シャの常連と自他共に認めている僕も、これまで店
を訪れた時は一度も彼女がフロアに出ているのを見かけたことがな
い。新しくバイトということだったら腑に落ちるけど、ボランティア
で店の手伝いをしていると口にしていたことを踏まえるとそうと
は考えにくい。

客でもなく店員でもない彼女がどうして店の手伝いをしているの
か疑問に感じ、思い切って来栖さんに質問してみる。

「客の入りを見て2人じゃ対応しきれないと思った丹が、あいつを
応援に呼んだんだよ」

「応援に呼んだって…どうしてです？」

「暇を持て余しているモンが忙しい時に家の仕事を手伝うのは当然だろ、ところで注文は決まったか？」

「ココアをお願いします。それよりも来栖さん、家の仕事を手伝うってことはあの子丹さんの妹なんですか？」

「ああ丹の下の子だ、小さい頃は可愛かったけど今じゃあんな生意気になっちゃった」

「おじさんみたいなこと言ってるし、クーくんも歳じゃない？」

来栖さんから彼女の素性を聞いて僕の溜飲が下がる一方で、ようやく注文を受けた来栖さんは彼女の成長を苦々しい表情で語る。成長するに従って憎たらしさだけが増したと愚痴を零す来栖さんに反論するように、彼女はわざと大きな音を鳴らして立錫の余地なく皿とカップが積まれたトレイをカウンターの上に置いた。

「うるせえ、まだ四捨五入すれば二十歳だ。用が済んだらさっさと帰れ！」

「手伝いはこれでお終い、今からは客としているわ。クーくんバナナジュース頂戴」

カウンターの前に並べられた椅子のうち、僕の右隣のものの背もたれにエプロンをかけると彼女は澄ました顔でその席に座って来栖さんに注文をした。

「中途半端に仕事投げ出したくせに、偉そうな口を利きやがって…」

「ママ、この店員感じ悪いよ」

「… 驕らないからな、ちゃんと金は払えよ」

「分かってるって。なんだかんだ言っても素早く切り替えが出来るんだから、さすがに歳を食っているだけあるねクーくん」

知り合いでも金を払ってもらえるからには客としてもてなさなければならぬと来栖さんは苦渋の選択をする。彼女は調子のいい返事をする、楽しい顔で頬杖を吐きながら注文したバナナジュースが出てくるのを待つ。

鼻歌を歌い椅子の下で足を揺すりながらキッチンでミキサーに刻んだバナナと牛乳を投入している来栖さんを眺めている姿は子どもっぽい、互いに見慣れているとはいえ年長者で強面の来栖相手に全く臆さずに接する彼女の豪胆さには感心する。

「何か用？」

「いや、別に……」

「お待ちどうさま」

僕の視線に気付いた彼女が怪訝そうな眼差しを向けてくると、適当にはぐらかして目を逸らした。正面に向き直るとちょうどカウンターの越しに来栖さんがごつい手で僕の前にホットココアの注がれたカップと、彼女の前に紙のコースターを敷いてその上にバナナジュ

ースのグラスを置く。

「そうだ、お前に頼みたいことがあるんだけど聞いてくれるか？」

「来栖さんが、僕に頼みたいことですか……？」

何となく気まずい雰囲気で蘇芳さんと隣り合ってココアを啜っていると、来栖さんがキッチンから身を乗り出してくる。濃い陰影に縁取られた来栖さんの瞳を正面に受けると、その威圧感に気圧されて反射的に身構えてしまう。

「そんなにビビんなくて、何も獲って食おうって訳じゃないんだ。数少ない店の常連としてお前に頼みたいことがある」

「…なんででしょう？」

恐る恐る見上げると来栖さんは狼が獲物を見つけたような獰猛な笑みを返してきた。気楽に話を聞くように言ってきた来栖さんの顔を見ると、僕は余計に不安を駆り立てられる。

「普通に学校行けるよう、こいつの相談に乗ってくれねえか？」

来栖さんは身を乗り出した状態で、僕の隣に座りグラスの底に沈殿したバナナジュースの残りを吸い上げている蘇芳さんのことを指し示した。

「えっ！？」

思わず僕は素っ頓狂な声をあげてしまうけど、来栖さんの唐突な申し出は彼女にとっても青天の霹靂であつたらしく蘇芳さんは幸せ

そんな顔で飲んでいたバナナジュースを嘔せてしまう。

S u g g a r a n d s p i c e
了

2、Foxy girl

「ど、どういづつもりよクーくん!？」

「ガキはちゃんと学校で勉強して来い。大人の俺たちが何度言っても駄目でも、同じくらのガキに説得させれば上手くいくかもしれないだろ?」

「そうよ蘇芳、あなたこの1ヶ月全然学校に行っていないじゃない。来年は受験生なんだから授業受けないとみんなに遅れちゃうわよ?」

彼女が発言の意図を問い質すと来栖さんは顔に似合わず至極真つ当な意見を述べる。来栖さんに続いてカウンターに戻ってきたこの喫茶店の女主人である丹さんまことも妹の進路を案じて学校に行くように勧めてきた。

「いいよ勉強なんかできなくたって、学校に行くばかりが人生じゃないじゃん」

「蘇芳、学校は勉強だけの場所じゃないわ。教室で過ごすことで少しずつみんなと上手くやっていく社会性を培う場所なのよ?」

「あたしは充分社会性を持っているから問題ないし、クラスの連中はみんな子どもだからつまないんだもん。街で適当に遊んでいる方がよっぽど有意義だわ」

「あなたの言いたいこともわかるけどね、蘇芳が学校に行かずに街を遊びまわっていたらきつと忠将さんただまさは喜ばないわよ?」

蘇芳さんは学校に行かないことの正当性を示そうと屁理屈をこねるが、丹さんは妹に優しい口調でしかし厳しさを覗かせながら説得を続ける。話に出てきた忠将という人が何者なのか分からないけど、その名前を聞くと蘇芳さんは不登校をしていることに後ろめたさを感じたようだった。

「……どうしても居心地が悪いんなら無理に学校に行くことはないって忠将も言ってたよ」

「それは小学生の時の話だろう、おまけにその頃は普通に学校行ってたじゃないか。減らず口ばかり言っていないでおとなしく学校に行け」

「クーくんだったらてろくに学校に行かない不良だったんでしょ、そんな人が学校に行くように言っても説得力ないよ！」

蘇芳さんはしぶとく自分が学校に行かない正当性を押し通そうとするが、来栖さんは彼女の言い分を一蹴した。でも蘇芳さんも来栖さんの過去の話を持ち出して意地になって反論すると、痛い所を突かれたらしく来栖さんは黙り込んでしまう。

「いい加減にしなさい蘇芳。クーくんは行きたくてもいけない事情があったから学校に通えない所もあったけどあなたは違うわ。通えるのに通おうとしないだけ、それじゃ駄々をこねている子どもと同じよ？」

周りにいるお客さんのことを考えて発せられた丹さんの声は決して大きくはなかったけれど、蘇芳さんを黙らせるには十分な迫力があつた。おっとりとした雰囲気や柔らかな表情で気付かなかったけど、蘇芳さんに向けられた丹さんの吊り目の眼光は鋭く、傍目から見て

いる僕でも気圧されてしまっただった。

今は優しくていい奥さんって感じだけど、実は学生時代の丹さんはぐれていて、それが来栖さんとの縁の始まりなんてことはないよな？

「じゃあ学校に行って何があるっていうのよ、学校で大人しくお勉強してこんななよしたい子ちゃんになるのがいいことなの！？」

保護者からの叱責に癪癪を起こした彼女は席から立ち上がると、自分の隣で喧々囂々の言い合いに圧倒されている僕のことを腹立たしそうに指差してきた。

あの、僕が頼りない男子高校生であることは否定しませんが、初対面の相手のことをそんなに悪し様に扱き下ろさなくてもいいと思うんですけど……

「誰もそんななまっちょろいガキになれとは言つてねえ、ちゃんと自立した大人になれるように社会経験を学校で積んで来いって言ってるんだ！」

「社会経験ならここでも出来るじゃない、わざわざ学校に行く必要はないわ。いざとなったら忠将のお店で働かせてもらつもの！」

来栖さんの恫喝するような一声は向けられた相手ではなく、部外者の僕を震え上がらせる結果となった。蘇芳さんは隣で怯えている男を他所に屈強な体躯に日本人離れした造作の顔の眉間に深く皺を刻んでいる来栖さんに食って掛かる。

「忠将さんはちゃんとした人間になつてほしくてあなたをウチに預けたんだから、そんなことをしてはあなたのためにもならないし忠将さんの思いを踏み躪ることになるわよ」

丹さんは聞き分けの悪い妹に対して少しきつい口調で言い聞かせる。先ほどと同じく忠将という人の名前を聞くと蘇芳さんは罵詈雑言を吐き出していた口を急に閉ざして、しおらしい態度を見せる。

蘇芳さんに関しての丹さんたちのやりとりを聞いているうちに、僕は彼女たちが抱えている事情がどんなものなのか漠然と見当がつき始めていた。

多分蘇芳さんは丹さんの血の繋がった妹ではなく、丹さんの家に養子として迎え入れられたのだらう。恐らく蘇芳さんは丹さんの家に迎えられるまで幾度か名前が上がっている忠将という人と暮らしていたんだらう。その忠将さんは余り大きな声では言えないような商売をしている人で、蘇芳さんの健全な生育を鑑みた上で丹さんの家に預けることを決めた。きっと丹さんの家族と蘇芳さんの過去にはこんなことがあつたに違いない。

幼少期は特に自分の境遇に疑問を抱かなかつた蘇芳さんだったが、思春期を迎えて世の中が少しずつ見えてくると自分の経歴の歪さに気付いてしまった。そして自分の背景が容認できずその反発として彼女は不登校になったのだらう。

「嫌だよ、自分は何もしてないのに親とか先祖のことでクラスメイトから変な目で見られるのは」

「あんた、あたしに同情しているの？」

彼女自身には何の落ち度もないのに、生まれてきた瞬間から偏見の目を向けられるレッテルを貼られてしまっていることに共感を覚えて僕は自然に独り言を呟く。するとそれまで自分の隣に座っている僕の存在を失念していた蘇芳さんが、僕の言葉に反応を見せた。

僕は俯いたまま横目で彼女の顔を見上げる。蘇芳さんはアーモンド形の大きな目で僕の横顔を真っ直ぐに見下ろしていた。

「同情されたことが気に障ったなら謝るよ。でも分かるんだ、自分の家族や親戚のことで周りから好奇の視線を向けられることの居心地の悪さは」

「そうね、吸血鬼の娘だって言っただけで、クラスメイトどころか他のクラスの奴らにドン引きされたりからかわれたりするのは堪ったモンじゃないわよね」

「へっ!？」

来栖さんから蘇芳さんが学校に行けるように彼女の相談に乗ってほしいと頼まれたことに続いて、僕はまた上擦った声を出してしまう。

反射的に首を横に向けて彼女の顔をまじまじと僕は見つめる。蘇芳さんは場を和ませようとして冗談を言っているのではなく、自分が吸血鬼の娘だということに対して周囲の理解が得られないことを本当に心外に感じているようだった。

「このご時勢に吸血鬼の娘だなんて自己紹介したら、引くのは普通だと思うけど……」

「どうして、だってこの街には吸血鬼は結構いるじゃない？」

それでも蘇芳さんがふざけているのだと信じて、僕は彼女の級友たちの反応は自然なものだと答える。だが彼女は僕の正論を聞き不思議そうに首を傾げながら再びおかしいことを口走る。

「…例えばどんな人が吸血鬼なんですか？」

「身近な人だとまこねえとまこねえのお母さん、それとあたしのお父さんの忠将」

蘇芳さんは自分の姉とその母親、そして自分の父親が吸血鬼だと答えた。僕は失笑することも忘れて引き攣った表情のまま、蘇芳さんの向かいに佇む丹さんに視線を移す。

丹さんは紙のように色白の美人で、実際の年齢である二十代半ばよりは若く見えるし、少々浮世離れたたふわふわとした雰囲気はあるけれど、そんな感じの人は丹さんの他にも大勢いる。

自身が経営するこの喫茶店ラング・ド・シャを丹さんは毎日昼前には店を開けているし、燦々と日光が降り注ぐ中商店街やスーパーに買出しに行っている姿を何度も見かけたことがある。結論から言えば丹さんが陽光に弱い吸血鬼であるはずがなく、蘇芳さんは信憑性皆無のほらを吹いているだけだった。

「何がおかしいの？」

「そりゃ吸血鬼なんているはずがないものをいって言い張って、しかも昼間働いている自分のお姉さんを吸血鬼だなんて見え透いた嘘をついたら誰だっておかしいでしょう？」

他愛もない嘘を滑稽に感じて僕の口元が緩んでしまったことに彼女は目敏く気付く。しかし僕は言い訳をせずに彼女の嘘を一笑にふすと、丹さんと来栖さんに同意を求めるように視線を向けた。

「いや、吸血鬼がないとは言い切れないだろう？」

「そうよ常葉^{とぎわ}くん、自分で確かめてもないのに断言するのはよくないわ」

意外なことに来栖さんと丹さんは彼女の荒唐無稽なほら話に食いついてきた。一瞬彼らも吸血鬼の存在を信じているのかと思っ僕は呆氣に取られてしまう。だが丹さんたちが頭ごなしに彼女の嘘を否定しなかったのは、下手に蘇芳さんの機嫌を損ねずに適当に話を合わせておいて彼女を学校に通わせようとする算段を踏んでいるのだろうと冷静に判断する。

複雑な家庭事情の悩みに加えて思春期特有の痛い思い込み、俗に言う中二病に罹患しているらしい蘇芳さんを社会復帰させるために、丹さんたちが苦労していることがうかがい知れた。

「…そうですね、いろんな人がいるこの世界に吸血鬼がいたっていいじゃないですか」

ここで吸血鬼が実在するか否かの議論をすることは不毛であり、僕は掌を返して丹さんたちと同じく吸血鬼が存在する可能性を示唆する相槌を打つ。

今話し合うべきはいるはずもない吸血鬼のことではなく、現実に人生を棒に振ろうとしている1人の少女をどうにか学校に戻らせる

道筋を立てることだった。ここで丹さんの妹の社会復帰に貢献しておけば、絶望的に見える僕の恋にも一筋の光明が差ししてくるかもしれないという下心も動いて、僕は大人たちと同じスタンスを持つと務める。

「ほらね、人間と吸血鬼は仲良くできるってあなたも思うでしょう？ 実際に吸血鬼のまこねえと人間のクーくんはお互いに好き同士で高校生の時から同棲しているもんね！」

都合よく僕の言葉を解釈した蘇芳さんに手を握られて、不覚にも一瞬僕はときめいてしまう。だが彼女の口から語られた丹さんと来栖さんの深い仲を聞いた途端、淡い恋心ががらりと音を立てて瓦解していくのを感じた。

「高校生の時から、同棲……」

「大切なのはそこじゃないよ、吸血鬼のまこねえと人間のクーくんが愛し合っていることだよ！」

「蘇芳、周りのお客様に迷惑だしそんなに大きな声で騒がないでちょうだい……」

「そうだ、お前の声が店中に響いて耳が痛いんだよ」

丹さんと来栖さんの関係について注目しているポイントに齟齬があったものの、蘇芳さんは再度2人が親しい仲である事を力説する。蘇芳さんに店にいるお客さんたちに自分たちの関係を言い触らされて、丹さんと来栖さんは本当に気恥ずかしそうだった。

「えゝだってホントのコトじゃん。あんまりにもまこねえとクーく

んの仲がよくて、あおいねえの目の毒だって言われたから斎さんの家から引越したんじゃない」

「俺たちは一人前と認められたから斎さんの家から独立したんだよ。飲み終わったんならさっさとウチに帰れ！」

「ウチってこの上じゃん、そんなに急かさなくてもすぐ帰れるじゃない？」

「ここは丹と俺の家だ、お前はいい加減に斎さんの家に戻れ！」

「だって斎さんのトコに居づらいんだもん、それにここならご飯もまこねえに作ってもらえるし」

「クーくん落ち着いて。仕事は終わったんだし蘇芳、上に戻りなさい」

保護者2人がうるたえるのを見て調子に乗った蘇芳さんは、ここぞとばかりに来栖さんをおちよくる。あんな恐ろしげな人をよくからかう気になれるものだと思改めて彼女の肝の太さに感服していると来栖さんの語気がどんどん荒くなっていった。

頑健な肉体を誇る来栖さんに暴れられては困ると丹さんはどうにか彼を宥めつつ、妹の蘇芳さんに店から出て行くように言いつける。

「えゝだってまだこの人に相談聞いてもらってないよ」

「だったら常葉くんも一緒に連れて行って、部屋で相談に乗ってもらいなさい！」

「えっ!？」

「分かった、それじゃウチに行こうか常葉」

蘇芳さんが店内に居座ろうとこねると、丹さんは僕を自宅に上げるといふ荒業で対処しようとする。憧れの丹さんのお宅に入れてもらえるという喜びと、そこが同時に苦手としている来栖さんの家でもあるという恐ろしさで僕の頭の中は混沌としていた。

椅子の上で硬直している僕を見かねて蘇芳さんは無理矢理椅子から立たせると、僕の手を引いて店の奥にある扉を開いて居住区画へと引き入れていった。

Foxy girl 了

3、P i t f a l l

二階建てになっているラング・ド・シャの建物の一階は喫茶店のフロアとキッチンで埋まっまことていて、丹さんと蘇芳さんそれに来栖さんの住まいになっているのは二階部分だけだった。

喫茶店スペースの裏になっている部分に入った時に靴を脱ぐべきかどうか判断に迷ったが、蘇芳さんがスニーカーのままで階段を登っていくのを見て外履きのままで上がっていいのだと察し彼女の後に続く。

「事務所として使われていたものを改築したものだから、靴のままで大丈夫だよ」

「分かりました、お邪魔します」

階段を登った先にある扉の前でも靴を脱ぐべきかどうか戸惑っていたが、先に室内に入っていた蘇芳さんが僕に一声かけてくれる。

年季を感じさせる木製の扉に取り付けられた真鍮のドアノブを捻って入った丹さんたちの住居は、ラング・ド・シャの店内と同じく綺麗に片付けられていた。玄関を入った場所がリビングになっているようで、壁際に置かれた液晶テレビを囲むようにソファがL字に配置されている。少し窓枠が小さいことが気になったが、もう夕方だし壁紙は染みや黄ばみのない状態で嫌な感じはしなかった。

「適当に座ってて、今お茶を出すから」

「ありがとうございます」

壁の向こうにある炊事場にいる蘇芳さんから椅子を勧められると、僕は遠慮なくソファに座らせてもらう。量販店で売っていきそうな合成皮革のソファの上には明るい柄のクッションが敷かれていて、その庶民的な佇まいが初めて訪れるこの家でも落ち着きを与えてくれる。

「はい、どうぞ」

蘇芳さんは円形のトレイの上に烏龍茶の注がれたグラス2脚とクッキーなどを適当に盛り付けた皿を乗せてリビングにやってくる。グラスと皿をやや乱雑にテーブルの上に並べていった。

仮にラング・ド・シャの店内で同じように食器を置いたら客からのクレームがあってもおかしくない対応で、他人事ながら僕は彼女がフロアに出ることに一抹の不安を覚える。

「そつえばさ常葉って幾つ、高校生？」

「今高1ですけど蘇芳さんは？」

「あたしは中2」

「やっぱり年下だったんだ」

年齢を訊かれたので正直に答えつつ年齢を聞き返すと、案の定彼女は中学生だった。現役の中学生ならば中二病にかかってもらえほど痛々しくはないと思いかけるが、十代半ばにもなって吸血鬼の存在を信じているような発言をするのはやはり芳しくないと思う。

「戸籍の上では中二だけどあたしホントは17歳なの、だから常葉よりも年上だよ」

…うん、冗談抜きにこの歳にもなってこんな痛い発言を繰り返すことは問題だ。できることなら付き合いたくない人種の子だけど、無碍に断ったら来栖さんに何をされるか分からないし、最悪二度とラング・ド・シャの敷居を跨げなくなりそうなので、腹をくくって少しでも彼女を現実に引き戻すよう試みてみることにする。

「ええと蘇芳…さん？」

「呼び捨てでいいよ、あたしも常葉のことを呼び捨てにするから」

一応相手を立てて敬称を用いようとすると、自称17歳の重度の中二病患者の中学生は寛大な態度で高校生に呼び捨てで呼称することを許可する。

「それじゃお言葉に甘えて。ねえ蘇芳、君もいろいろ大変な経験をしたみたいだけどだからってお姉さんたちを困らせ続けるのはよくないんじゃないかな？」

「まこねえたちを困らせてなんかいないよ、むしろ力になっているんじゃないかな」

一言断りを入れると僕は込み入った家庭の事情があるにしても、それを理由に不登校になったり奇矯な発言を繰り返したりするのはよくないから、お姉さんたちのことを考えてまともに生きてあげるように説得を試みる。

だが蘇芳は自信満々といった様子で自分が丹さんたちの重荷には

なっておらず、逆に今日のように店が忙しくなった時に手助けをして支えていると即答してきた。

「…それでもさ、やっぱり君が普通に学校に通ってあげるほうが丹さんたちも嬉しいんじゃないかなあ」

開始早々折れそうになった心をどうにか奮い立たせて、僕は自身も悩める高校生にも関わらず問題児の更生を試みる。

「常葉はなんで居心地が悪いのに学校に通うの、自分は全然楽しくないのに親のご機嫌取りのために無理して行ってるの？」

諦め半分で言った僕の提案を聞き流すと、蘇芳は意外と鋭い切り返しをしてくる。おかしいことばかり口になっているけれど、実際のところ彼女の頭はそんなに悪くないと思う。ただ考え方のベクトルが一般常識から若干、いやかなりずれているだけなのだろう。

「学校が楽しくないわけじゃないさ、友達だっているし授業だって嫌いじゃない。それに立ち回り方を間違えなければ嫌な思いをしなくても済むって分かったし」

「やっぱり無理してるじゃない、そんな風に他人の顔色覗いながら毎日過ごしても心から楽しめる訳ないじゃん。そのうちどこかでガタが来るよ？」

「わかったような口を利くなよ。不登校で年甲斐もなくいるはずのない吸血鬼のことを信じているような現実とアニメの世界の区別もつかない子どものくせに！」

学校に通わず妄想の世界に逃げている自分のことは棚に上げて、

僕のことを全部見通しているようなことをいう彼女に腹が立ち、僕は思わず感情的になってしまう。年下の女の子相手に情けないと思ったが、吐いてしまった暴言はもう取り消せなかった。

「…ごめん、やっぱり僕なんかじゃ君の相談相手にはなれない」

蘇芳の顔を見る勇気が沸かず、僕は俯いて彼女から目を背けたまま席を立つ。同級生どころか中学生にも馬鹿にされるような奴が、人生相談なんて出来るはずがなかった。

自分の不用意な一言のせいでいきなり相談に失敗してしまい、蘇芳のお姉さんである丹さんが開いているラング・ド・シャにも来づらくなってしまうことに今更後悔する。丹さんの柔和な笑顔だけでなく、来栖さんの仏頂面も見られなくなると思うとなんだか寂しい気がしてならなかった。

「ねえ常葉、あんたが言ってたクラスの人たちから白い目で見たことって何？」

項垂れたまま玄関の前までやってきた僕の背中に蘇芳が無神経な質問を浴びせてくる。

「言いたくないよ、よく知りもしない人にそんなこと教えるはずがないだろう？」

「常葉はあたしの話を聞いたのにあんたのことは教えてくれないなんてずるい」

一方的に話を聞くだけで帰るのは卑怯だと責められると、なんだか良心が咎めてきてドアノブに伸びた手を引き戻してしまう。

「それでも言いたくない、聞いたら君だって僕のことを変な目で見
るに決まっている」

「あたしは強力な吸血鬼忠将の娘だよ、ちょっとやさつこのことじ
や驚いたり常葉のことを変に思ったりしないから安心して」

はつきりと蘇芳に僕の秘密を打ち明ける意思ないことを示してこ
の部屋から出て行こうとするが、またも彼女が口走ったおかしな発
言に出鼻を挫かれてしまう。

よく恥ずかしげもなく強力な吸血鬼なんて言葉を口に出せるもの
だと噴き出したくなる一方で、その恥じらいのなさが自分よりも年
上で体格も大きい来栖さんに臆せず接することが出来る蘇芳の胆
力に繋がっているのではないかと思った。

「いいからさ、あんたが隠していることをあたしに教えなさいよ」

ドアの前で立ち往生しているうちに、いつの間にか目の前に蘇芳
が詰め寄っていた。彼女が僕の左腕を掴んで自分に正面を向くよう
に引き寄せてくると、僕はされるがまま体の向きを変えられて蘇芳
と対峙してしまう。

「もう逃げられないよ、大人しくあんたの秘密を白状しなさい」

丸顔のせいで子どもっぽく見えたが、蘇芳の身長は中学生の女子
にしては低くない。底が平坦なスニーカーを履いているのに目線の
高さはそれほど僕と変わらなかった。

若干上目遣いで僕の顔を見上げてくる蘇芳の瞳の色は薄く、ぱっ

ちりと開いた眦と合わせて猫のような印象を覚える。その印象のせいで一瞬蘇芳の瞳孔が猫のように縦長に伸びているように錯覚してしまった。もちろん目を凝らしてみると彼女の瞳孔は普通の人間と同じように円形だった。

「…僕は陰陽師の末裔なんだ。時を重ねるうちに陰陽師の役職を失うどころか禁中への出入りもしなくなっていくの間にか普通の人になっていたけど、先祖が陰陽師だったってことを示す家計図だけはしっかりと残っている」

蘇芳の猫のような目に見られているうちに、僕は自然と学生生活をつつがなく乗り切るためにひた隠しにしていたことを語り始めていた。だが僕の話聞いて蘇芳がどなりアクションをするのか見るのが怖くて、視線は床に向けて彼女の顔を見ることができなかった。

「へえ、それじゃ常葉は霊感強いのか？」

「全然、幽霊や妖怪なんか見たことないし超能力が使える訳でもない。そもそもそんなもの作り話のなかだけのものに決まっていると僕は信じているのに、陰陽師の子孫ってことをダシにして周りは茶化してくる。むきになって怒ると、念力で復讐されるとか呪いかけられるとか言いながら散り散りに逃げていくんだ」

蘇芳の質問に対して僕は首を横に振りながら、自分に超常的な力など一切備わっていないことを告げる。いっそ本当に念力や呪いが使えたらどんなによかっただろう。でも見たくもない幽霊や妖怪を見えるのは嫌だなあ。

「その気持ち分かるなあ。あたしも吸血鬼の娘だって言ったらにん

にくを投げられたり、お清めの聖水とか言ってバケツで水をかけられたり、日光に当たって灰になれて長袖のジャージを隠されたりしたから。こっちの抱えているものを面白半分に言われるのはかなりむかつくよね」

「そうだろ、だから僕は自分が陰陽師の末裔ってことを秘密にしているんだ。知らなければ余計なことを言われることもないから」

君の場合はそんな中二病全開な発言を公言したからであって、自業自得と言いたい気持ちを抑えて僕は自分のルーツを明かしたくない理由を述べる。

「常葉の言い分も分かるけど、何も意地になって隠すことはないんじゃない」

「君は他人事だと思っているからそんなことを言えるんだ」

人の話を聞くだけ聞いておきながら、やっぱりこの重症の中二病患者は僕の気持ちなんて考えていなかった。蘇芳への怒りがつつつと胸の中で湧き上がってくると、僕は視線を上げて彼女の顔に剣幕を向けようとする。

「だってさーそういうレベルの低いじめなんて今時中一だってやらないよ？　むしろ先祖が陰陽師だってことが判明している家計図が残っているってことは常葉の家は結構いい家庭なんじゃない。それって社会に出て結婚とかを考える際にはちよつとした肩書きになると思っただけ」

だが現実と妄想の世界が混在しているように思えても蘇芳も女だった。普通に学校に通っている子達と遜色ない打算的な発言を彼女

がするのを聞いて、むしろ小学校時代のトラウマを引き摺っている自分の方が彼女よりも子どもなのではないかと思い始める。

「ぼーとしちゃってどうしたの常葉、話が済んだなら帰っていいよ？」

「…いや、やっぱりまだ帰らない」

呆然と目の前で立ち尽くしている僕の顔を蘇芳が覗き込んでくると、玄関の扉に背を向けたまま僕は彼女の脇を素通りしてリビングの奥へと戻り始める。

「なんで？」

「丹さんたちに頼まれたことをまだやり終えてないからね、中途半端に投げ出すのはよくないからさ」

蘇芳が僕の横に並んでここに留まろうとする理由を訊ねてくると、僕は横目で彼女を一瞥しながら頼まれごとを完遂する意思を告げる。

「無駄だよ、あたしは学校に行くつもりないもの」

「蘇芳、意地になっっているのは君のほうじゃないか。吸血鬼の娘ってことを誇りに思っているのなら周りの目を気にせずに堂々とそれを公言すればいいだろう？」

「吸血鬼の忠将の娘ってことはみんなに言っているよ」

「だったらなおさら学校に行くべきじゃないか？」

「学校に行きたくない理由は吸血鬼の娘ってことを馬鹿にされるのが嫌なことじゃない。どうでもいいことなのに、みんながそれに拘るせいであたしが嫌な思いになることが原因なの」

蘇芳も頑なに自分が学校に行くつもりがないという意味を表明するが、彼女の言葉を借りて彼女自身が自分の存在を隠して世間から逃避しているだけだと指摘する。しかし予想に反して蘇芳が学校に行きたくない理由は吸血鬼の娘と公言したせいで周囲から冷ややかな目で見られることではなかった。

確かに自ら進んで吹聴しているのだから、それをいくらネタにされても蘇芳が気に病む可能性は考えにくい。ならば何が彼女を学校から遠ざけているものなのだろうか？

「その原因って何？」

僕は彼女の足を竦ませ、丹さんたちの悩みの種になっている問題の核心に迫るために諸悪の根源が何なのかを蘇芳に訊ねる。

僕は至って真面目な顔で彼女を直視したし、蘇芳も僕の誠意に応じるように真正面から見返してきた。

「秘密、まこねえたちにも言いたくない事をあんたに教える訳ないじゃない」

沈黙の後、僕の問いかけに対する蘇芳の回答は極めて不実なものだった。蘇芳は小ばかにするように薄くて細い舌を口から覗かせてくる。

身内の丹さんたちにも言えないような悩みを初対面の僕に打ち明け

るはずもなかったが、自分の家系の秘密を暴露させられた身としては非常に不愉快であった。

「人の秘密は聞くだけ聞いておいて…そっちがその気ならこっちにも考えがある」

「そうそう、出来っこないミッションは断念するのが賢い選択だよ」

「君が学校に行きたくない本当の理由を話してくれるまで、僕は君の相談を続ける」

「えっ!?!」

僕が彼女を学校に行かせるという頼まれごとの匙を投げると蘇芳は考えていたみたいだけど、そうは問屋が卸さない。こっちが余人に明かしたくない秘密を打ち明けたのだから、彼女の抱えている秘密を聞き出さなければなんだかアンフェアだ。

僕が下した選択を蘇芳は全く予想していなかったらしく、虚を突かれたようにアーモンド形の目を丸くしてこちらの真意を確かめようとしてくる。

「さて、そうと決まれば丹さんたちに相談を続けるって了承をもらってこなくちな」

「余計なお世話よ。それに中学生に付き纏う高校生ってキモいよ?」

「だって君、ホントは17歳なんだろう。年下を付け回すよりはマシじゃない?」

「と、とにかくあたしはあんたが頻繁にウチに出入りするのは嫌だからね！」

「だったら実家に帰れば、そうすれば僕と顔を合わせることもないだろう？」

蘇芳自身の発言に丹さんたちの希望を合わせた僕の言葉にとうとう彼女は返す言葉に詰まってしまう。散々言い負かされてきた蘇芳が洪面を浮かべるのを見て、僕は彼女に一矢報いた気分になる。

そして僕は階下で仕事をしている丹さんたちに相談を続ける承諾をもらいに、蘇芳たちの住居である二階の部屋を出た。

P i t f a l l 了

3、P i t f a l l（後書き）

『ラング・ド・シャ』 1杯目をお読みいただいた方には感謝申し上げます！

過去の作品よりはテンポが良くなるように心掛けましたが、次回
はもっとハジけた展開になるようにしていきたいと考えております。

2杯目（いつの投稿になることやら…）もお付き合い願えれば幸いです。

4、Contingency(前書き)

今回より2杯目のエピソードです。しばらく登場人物紹介に終始し、毎回新しい人物が登場する流れになって、一人一人の掘り下げはあまりしないと思いますがご了承ください。

4、Contingency

晩秋の日暮れは早く、学校から下校する電車が最寄りの駅に着いた時にはすっかり陽は沈んでしまっていた。街灯がぼつぼつ点つていたり、家々の窓から明かりが漏れていたりするから辺り一面真つ暗という訳ではなかったけれど、冷たい秋風に吹き付けられると妙に心細い気持ちになる。

こういう時は熱いコーヒーでも飲みながら丹まごさんの暖かな笑顔を
見て身も心も温かくなろうと思ひ立ち、僕は家路から脇道に外れて
行きつけの喫茶店へと進路を変える。

僕が足繁く通っている喫茶店ラング・ド・シャは自宅から徒歩5
分の距離にあり、まっすぐ歩けば家の前に辿り着く道を手前の路地
で曲がればすぐの所に立地している。程よく空調の利いて柔らかい
光に包まれている店内をイメージしながら、足早に路地を奥に進ん
でいった先にラング・ド・シャの店舗はひっそりと佇んでいた。

しかし万年閑古鳥が鳴いているような客入りでもほぼ年中無休で
営業しているラング・ド・シャの店内に今日は明かりが点いていな
い。結構遅くまでやっているの店仕舞いにも早すぎる時間であつ
たし、今日が休みになるという話は先日店の女主人と話した時にも
聞かなかった。

都合によりしばらく休業させていただきます

優美な女性の字でそう記された入り口のガラス戸にある張り紙を
見て、僕はその場に呆然と立ち尽くす。僕が懸念していた通り、ラ
ング・ド・シャの経営状態はいつ傾いてもおかしくない状態だった

のだ。少しでも店の延命に繋がればとなけなしの小遣いを叩いて週に何度か顔を出していたが、案の定高校生1人が店に落とす金くらいでは到底経営の建て直しが図れるはずがなかった。

「こんなことって……」

少し濃い目に入れてあるコーヒーや自家製スコーンの香ばしい香り、鼻腔をくすぐるクリームブリュレの焼けた臭いそして他愛もない丹さんや来栖さんとのやりとりを二度と体感できないと思うと、僕はたまらなく寂しい気持ちになった。

「すみません、今日はお休みなんです…なんだ常葉か^{ときわ}」

廃業してしまったように荒涼とした雰囲気のレストラン・ド・シャの前に忘我状態でいる僕に、背後から呼びかけてくる若い女性の声が聞こえる。振り向いた先には緩く編んだ三つ編みの少女がコンビニのビニール袋を手に提げて立っていた。

「休みって何があつたんだ、蘇芳^{すおう}？」

「何って、まこねえとクーくんがどっちもないんだから休みにするしかないじゃない」

「だから2人が揃って出かけている理由はなんなのさ？」

「クーくんが副業でやっているエクソシストの仕事の依頼が入って、まこねえもそれについていったからだよ」

レストラン・ド・シャの女主人である丹さんの妹で、現在不登校を続けている中学生の蘇芳に店が臨時休業している理由をこちらは真面

目に訊ねたのに、彼女は見え透いた嘘をついて話をはぐらかそうとする。

「どうせならもう少しマシな嘘を吐けよ、そんな話子どもだって信じる訳ないだろ」

「嘘じゃないよ、科学じゃ解決できないことは今もいっぱいあってエクソシストの需要はそれなりにあるんだよ。陰陽師の末裔のくせに常葉はそんなことも分らないの？」

「陰陽師の末裔だからそんなことがホラ話だって分かるんだよ。高度に科学が発達した現代には妖怪も陰陽師も吸血鬼も存在する余地はないんだ。おおかた丹さんたちは経営が成り立たなくなったらラング・ド・シャの廃業の手続きかなんかで忙しいんだろ？」

「お店が赤字続きなのは事実だけどね、だからクーくんがエクソシストの稼ぎをその穴埋めに充ててるんじゃない」

真っ赤な嘘でお茶を濁そうとする蘇芳の態度は極めて不実なものだと思うけど、虚言癖があって妄想力が豊かな重度の中二病に罹患している彼女の戯言にムキになるのは体力と気力の浪費でしかない。

僕は辛抱強く蘇芳の妄言に付き合いながら、現実的な見解を述べて彼女から店が置かれている実際の状況を聞きだそうとする。だが蘇芳は相変わらずのらりくらりと詭弁を弄して僕の話に真面目に応えようとしなかった。

「人をからかうのもいい加減にしろよ……」

「最近冷え込んできたよね、外で立ち話もなんだし中に入らない？」

まこねえたちが出かけてからまともに他人と話してなくさ、そろそろ誰かと話をしたいと思ってたんだよね。あたしの相談に乗るよ、うにまこねえたちから頼まれてるんだし、ちよつと話に付き合つてよ常葉」

そろそろ堪忍袋の緒が切れそうになってきて僕は押し殺した低い声で蘇芳にことの真相を打ち明けるように迫るが、彼女は僕の恫喝など何とも感じていないらしく施錠された入り口の鍵を解放しながら店の中で自分の話し相手になるように言ってくる。

「…お邪魔します」

今夜は随分寒くなるらしいという天気予報の正当性を裏付けるように、一際冷たい風に曝されると僕は蘇芳に誘われるままラング・ド・シャの店内に足を踏み入れる。どうせあのまま外で話していても埒が空きそうになく、寒いのを我慢するのも無駄になりそうだからせめて暖くらいはとらせてもらおう。

それに蘇芳が学校に通う手助けになるよう彼女の話し相手になるように丹さんたちからお願いされている義理もあるし、話している間に蘇芳が店の実情に関して尻尾を出してくれるかもしれないし。

「暖房入れたばかりだから今は寒いかもしれないけど、そのうち暖まるからそれまで我慢して。飲み物は烏龍茶でいい？」

「うん、でもできれば温かいものが欲しいな」

「分かった、レンジで温めるね」

蘇芳は手に提げていたコンビニのビニール袋を暖房の正面にある

テーブルの上に投げ出すと、キッチンに入って冷蔵庫の中を物色すると烏龍茶のペットボトルを取り出し、コーヒークップに中身を注ぐ。

人の話を碌に聞こうとせず、会話が噛み合わないことがよくあるけれど、時折お店の手伝いをしているせいも意外と気が利く所が蘇芳にはあった。僕が烏龍茶を温めて欲しいと要求すると、その通り烏龍茶を注いだグラスをレンジに入れて加熱のスイッチを入れる。

数分後、蘇芳は暖めた烏龍茶の入ったカップとココアの注がれたカップを持ってフロアに戻ってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「休日割引で200円でいいよ」

「…やっぱり金はとるのかよ」

「当たり前でしょう、こっちはお店のものを出してあげたんだから」

丁寧な烏龍茶の入ったカップを僕の前に置いた蘇芳に礼を言うと、蘇芳はお茶代を請求してきた。溜飲が下がらない思いもするが、蘇芳が出したウーロン茶は厳密には彼女の家のものではなくラング・ド・シャという喫茶店のものなのであまり文句は言えないと感じる。

しぶしぶ財布から100円硬貨を2枚取り出してテーブルの上に置くと、蘇芳はさも当然と言わんばかりの顔で自分の懐に収めた。

テーブルの上に投げ出していたレジ袋からマカロニグラタンと肉まんを出すと、蘇芳は湯気を立てるそれらを美味しそうに頬張り始める。昼飯の弁当以来何も口にしておらず、そろそろ空腹を感じてきた僕にとって自分の前には烏龍茶しか置かれていないのに相手が温かい食事を食べていることは拷問に等しかった。

「独りで食べると何を食べても味気ないよね」やっぱりご飯は誰かと一緒にじゃなくちゃ」

「…だったら学校行けよ」

食欲をそそる香りが周囲に漂い、口の中に滲んできた唾液を飲み込んで僕は負け惜しみのような一言を呟く。それと同時にどうして蘇芳が学校に行くという単純なことに強い忌避感を抱いているのかと、僕は改めて不思議に思った。

姉が吸血鬼でその恋人はエクソシスト、自分は吸血鬼の娘という若干、いや多分に電波な発言を口にするし、他人の話に耳を貸さず自己中心的な言動を繰り返す集団生活を送る上で様々な問題点を抱えてはいるものの、蘇芳は内向的な性格ではない。

初対面で2歳年上の僕にも馴れ馴れしく接してきたことを皮切りに、普段から歳の離れたお姉さんやその恋人と関わっているせいか蘇芳は他人や目上の人間にも物怖じせずに話しかけることが出来る。

また漫画と現実の区別がついていないようなイタいことばかり口走っている割に、接客業である喫茶店の手伝いを自ら進んで引き受けていることのおかげか、場合によっては僕よりも世慣れた意見を述べることもある。

よくも悪くも自分というものをしっかりと持っており、しかも他人と関わることに恐れや抵抗を感じていないように見える蘇芳が学校に通うことに関しては消極的になるのはいまいち腑に落ちなかった。

まあ、不登校の人がみんな内気で社交性に乏しいって訳ではないし、傍若無人に見える蘇芳にもどうしても我慢できないことがあるから学校への足が遠退いてしまっているのだろう。

とはいえ蘇芳はまだ中学2年生で義務教育を受けなければならぬ年齢だし、今の世の中それなりに学歴がなければ将来的に苦労してしまう。彼女の保護者である丹さんたちだけでなく、僕個人としてもこのまま蘇芳が不登校を続けるのはいいこととは思えない。

「あのさ、蘇芳……」

「なに？ 悪いけどこれはあたしの晩ご飯なんだからあげないよ」

やはり丹さんたち家族だけでなく蘇芳自身のためにも彼女が学校に行くように説得すべきという使命感に駆られて、僕は改めて彼女に話しかける。しかし蘇芳は半分ほど残っているマカロニグラタンのプラスチック製のトレーを自分の手元に引き寄せて、一口たりとそれを恵んでやる気はないと言い張った。

「……そうじゃなくて、学校に行こうよ。学校に行けば話し相手もあるし、少なくとも昼の弁当は独りで寂しく食べなくてもいいだろう？」

「やだ、学校には行きたくない」

「どうして、君ならきつと上手くやっていけるさ。それに将来のことを考えても、ちゃんと学校に通って勉強しておくべきだよ」

「勉強が何の役に立つの？　いくら成績が良くてもそれだけでお金が稼げる訳じゃないんだよ。お勉強だけしかできない生活力のない人間になることがそんなにいいことなの？」

「そうとは言わないけれど、やっぱりちゃんとした仕事に就きたければそれなりの学が必要だろ。それに勉強すらしてない奴が勉強が何の役に立つかなんていつても、屁理屈こねているだけにしか聞かえないよ？」

「あたしの言っていることを常葉がどう思おうと関係ないわ。それにあたしは勉強が嫌なんじゃなくて、学校って言う仕組みが嫌いな。あんな居心地の悪い場所に毎日いたら、きつとどうかしてしまっわ」

既に蘇芳の頭はどうかしてしまっている、とつつこみたかったが、余計に話を拗れさせる結果にしかないだろうと喉まで出かかった言葉を飲み込む。

「…例えば学校の居心地が悪くてもさ、ずっと家に閉じ籠もっているよりはマシじゃないかな。少なくとも家の中にいたら特定の人にしか顔を合わさないけれど、学校なら大勢の人間と関わって新しい刺激を受けることはできるんだし」

蘇芳自身が他人との関わりを求めていることは明らかだったし、彼女は人前に出て話をする能力は充分備わっている。だから居心地の悪さを我慢して、学校の持つメリットに目を向けるよう呼びかけてみる。

「まこねえやクーくん、それにお店に来たお客さんたちはあたしのことをちゃんと見てくれる。でも学校じゃ誰もあたしのことを見てくれない」

「そんなことないよ、きっと君のことを分かってくれる人だって……」

「学校の中じゃ、絶対に、誰もあたしを蘇芳として見てくれない。偽りのあたしを本物にして、本当のあたしを見ようもしない。それが嫌だから、あたしは学校に行きたくないの！」

だが蘇芳は学校以外の場所なら本当の自分を見てくれるのに、学校の中では誰もそうしてくれないと頑なに僕の意見を否定した。

子ども染みた言い訳だったけど、自分の上辺と本質の葛藤という蘇芳の発言にしては割合まともなことを耳にして、僕自身は彼女が嫌悪感を抱いている学校の人間たちのように蘇芳のことを誤解しているのではないかと思い始めた。

年甲斐もなく蘇芳は存在するはずのない吸血鬼や詐欺でしかないエクソシストの活動を妄信しているけれど、それは実の親と早くに離別して丹さんの家の養子として成長した彼女が抱えている複雑な事情から目を背けるための手段なのかもしれない。

蘇芳は自分の生い立ちに思い悩むせいで傍目からは見れば問題のない家庭に育っているクラスメイトにコンプレックスを感じていることが、蘇芳がうまく学校に馴染めない要因になっている可能性は大きい。

痛々しい発言や傲岸不遜な態度で偏見の目を持ってしまったけれど、蘇芳はごく普通の思春期の悩みにもがき苦しんでいる女の子だからこそ、学校に行くということに非常に大きなハードルを感じているのだと僕は思うようになった。

「そりゃ丹さんや来栖さんは小さい時から君のことを見てきたから、学校にいる人たちよりも君のことを詳しく知っているさ。これからもずっと丹さんたちの傍に居続けるのなら学校に行かなくてもいいかもしれないけれど、君は本当にそれで満足なのか蘇芳？」

「それは……」

中二病を患った虚構の世界に生きる変人というフィルターを外して、どこにでもいる繊細な悩みを抱えた女の子として蘇芳を正面から見つめながら、僕はこのまま不登校を続けることが彼女の望みなのかと問う。すると蘇芳は初めて僕の問いに対する返答に窮した。

やっぱり蘇芳自身も学校に行きたいという願望も持っているんだ、ならばその気持ちを行きたくないという気持ちよりも強くできる後押しをしようと思って、僕は次に彼女に語りかける言葉を必死に思案する。

「やっと捕まえたわ、蘇芳。電話は家電もケータイも無視、メールはいつまで経っても返信してこないから直接ここに来る破目になったじゃない。多忙なアタシの時間を割かせるなんてアンタ何様のつもり！？」

僕がじつと蘇芳の顔を見据え、蘇芳が視線を横に泳がせた状態で互いに黙り込んでいると、入り口のベルがけたたましく鳴り響き、女性の怒号が矢継ぎ早に飛んでくる。

狭い店内に反響する罵声を挙げた女性の方に視線が自然と向いてしまう。ブーツの踵が床を打つ音と共にこちらに歩み寄ってくる女性の顔を僕は覗き見る。

元々量が多く長い睫毛をマスカラで更にボリュームを出した目は勝気で気性の激しそうな性格を感じさせる切れ長の形をしており、筋の通った形のいい鼻をした顔は丹念に化粧が施されている。

しかし厚化粧でなければいいという感じはなく、アイシャドウのラインの引き方やファンデーションの塗り方を上手い具合に抑えて自然な感じで全体の化粧の乗りを整えており地の顔立ちの輪郭を残している。そして輪郭を残している元々の顔は少々性格がキツそうであることを差し引いてもかなりの美人と言えるものだった。

ヒールの高いブーツを履いていることも合わせて、身長は僕と同じく170cmくらいありそうに見えた。高めの身長に比例して手足もずらりと長く伸びており、姿勢よく歩く姿はファッションショーのモデルのようだ。

「あおいねえ、どうしてここに？」

店の中に入ってきた美女は僕らのテーブルの前に仁王立ちすると、僕と蘇芳を交互に見比べる。僕はその女性と目が合った瞬間、彼女の覇気に圧倒されて萎縮するが、蘇芳は彼女がここにやってきたことに驚いているものの、親しげに愛称で呼びかけた。

Contingency 了

5、Sisters

「どうして、じゃないわよ。どうせアンタはまだ駄々こねて学校に行ってないんだろうと思って、様子を見に来たのよ」

「学校には行ってるよ、この人は学校の友だちで……」

「バレバレの嘘言うんじゃないよ、この子は北辰学園の高校生じゃない。公立校の中坊のアンタと同じ学校な訳ないじゃない」

「あうち……さすがあっちこっちの学校の男と遊んできただけあって、制服には詳しいね」

「アンタは一言も二言も余計なのよ。とにかくこの子がクラスメイトじゃない以上、学校には行っていないでしょ？」

「……うん」

突然ラング・ド・シャの店内に入店してきた女性は、蘇芳の吐いた苦し紛れの嘘を即座に見破って説教を始める。女性に学校に行っているという嘘を看破させると、蘇芳はいつになく小さくなった。

「ところでアンタ誰？ 姉さんもクーくんもいなくて休みにしている店に蘇芳と差し向かいでいたってことはただのお客さんではないと思うけど、もしかして蘇芳の彼氏？」

「えっと、僕は……」

「蘇芳だって彼氏がいてもおかしくない歳なんだし、彼氏なら彼氏、

違うなら違うとはつきり答えなさいよ。ま、どっちにしても優柔不断で頼りないタイプには変わりないけどね」

とりあえず蘇芳の恋人でないことは明らかだったが、彼女との関係性をいまいち僕自身も把握していなかった。自分の立場をどう答えるべきかと考えている暇も与えてくれずに、女性は僕が返答に詰まっていることに不満を向けてくる。

「上鳥羽常葉かみうはつじょうはです。蘇芳さんとは、その、彼女が学校に行けるように相談相手をしている者です」

「相談相手？　そういえばこの間会った時、姉さんがそんなこと言っていたわね。でも上鳥羽くんに相談を聞いてもらっている効果は全然ないみたいだけど？」

「す、すみません……」

「別に謝ることじゃないわ。蘇芳に嫌がることをさせるのは扱いに慣れたアタシでも一苦労だもの、アナタが出来なくても何の不思議もないわ」

名前と蘇芳とは彼女の相談相手として接しているという肩書きを明かすと、女性は僕が相談に乗っている効果がまるでないことを責めてくる。切れ長の眼に一瞥されて僕は背中に冷たい汗が滲むのを感じるが、意外と女性は寛大な態度を見せてくれた。

「ちょっと蘇芳、せっかくアタシが足を運んであげたんだから、ぼうつとしてないでコーヒーくらい出しなさいよ」

「あおいねえは恋に勉強に忙しいから、すぐに帰るんじゃないの？」

「喉が渴いたの。それに寒い中歩いてきたから体が冷えちゃったわ、だから暖まるものちょうだい」

「はい、まったく人遣いが荒いんだから……」

蘇芳はぶつぶつ文句を言っではいるものの、女性に言われた通りキッチンでコーヒーを淹れる準備を始める。蘇芳がコーヒーの用意を始めると、その女性は蘇芳が食べかけていたマカロニグラタンのトレーをテーブルの隅に押しやって我が物顔で席に座った。

お姉さんの丹さんや強面の来栖さんでさえ持て余している感じのある蘇芳を、顎で使うこの女性は何者だろうかとちらちら盗み見しながら僕が見当をつけている視線に女性は気付いたらしく、忙しくケイタイでメールを打っていた指を止めて僕を見返してくる。

「アタシが誰なのか分からないとアナタも落ち着かないでしょうし、一応自己紹介をしようかしら。アタシは切島葵^{きりしまあおい}、ここの店長は姉であつちでコーヒーを淹れさせているのが妹よ」

「よろしくお願いします」

ああ、やっぱりこの人も蘇芳のお姉さんだったんだ。丹さんが蘇芳のお姉さんだと分かった時はちよつと意外な感じがしたけど、葵さんが蘇芳のお姉さんと言われるとしっくりするのは強引な所が似ているからだろうか？

改めて葵さんの容姿を覗いてみると、顔立ちはやっぱり血の繋がっていない妹の蘇芳ではなくお姉さんの丹さんに似ている。でも気の強そうな鋭い眼光は丹さんの切れ長だけと柔和な目つきと違って

いるし、全体の雰囲気は丹さんよりも蘇芳に近い気がする。いや、むしろ蘇芳の雰囲気はすぐ上のお姉さんである葵さんに似ているのだろう。

「上鳥羽くんって言ったつけ。アンタのことどっかで見たような気がするのよね、前に会ったことはないわよね？」

「ええ、多分ありません。今日葵さんにお会いするまで蘇芳さんのお姉さんは丹さんだけだと思っていましたから」

葵さんは思い当たる節がありそうな顔で僕の風体を見回してくる。年上の美人に凝視される気恥ずかしさで僕は少々緊張するが、葵さんとはこれが初対面であると答えた。

「そうよねえ、やっぱり気のせいかな。あ、一応断つとくけどクーくん…じゃなかった姉さんたちとここに同居している強面のゴツい男は姉さんの恋人だけでアタシや蘇芳とは何の関係もないからね」

「あおいねえは冷たいなあ。クーくんとはまこねえと一緒にここに住むまで、ずっと同じ家で暮らしてたんだから家族みたいなモンじゃない」

来栖さんは丹さんの恋人というだけで、自分たちとは何の繋がりもないと葵さんは力説する。しかしコーヒーを運んできた蘇芳は姉の言葉を打ち消して、来栖さんは家族も同然だと訴えた。

「…クーくんは高校の時からウチに居候させていただけよ。言わばアタシたちとは大家と賃借人の関係なだけで家族なんかじゃないわ！」

「まこねえとクーくんが一緒に出て行つたのが寂しくて、あおいねえが部屋の中で声を殺して泣いていたことあたし知ってるよ」

「な、泣いてなんかいないわよ。むしろ目の上のたんこぶがいなくなつてせいせいとした気分だったわ」

「強がり言っちゃつて、まこねえたちが出て行つてから最初の1週間は毎日電話してたじゃない」

「あれはなんていうか…そう、監視の電話よ。2人つきりになつて惚気っぱなしじゃないか、ちゃんと喫茶店の仕事をしているのか確認してただけよ！」

些細なきっかけで口論し始めた葵さんと蘇芳だったけど、そのやり取りを傍観しているうちに僕の中で葵さんの印象が変化し始めてきた。気安く近寄りがたい雰囲気のできる女を意識していて僕もそう感じていた葵さんだったけど、蘇芳と喧嘩している姿は中学生の妹とそう変わらない子どものように思えてくる。

居丈高に振舞つて高嶺の花のように見せかけているけれど、本当の葵さんは感情的で軽口の一つ一つにムキになつて応戦しているようである。下手をすると妹の蘇芳よりも精神年齢が低いんじゃないだろうか。

「あおいねえは昔からまこねえとクーくんが2人きりになるのを嫌がつていたよね」もしかしてあおいねえはクーくんのが好きなの？」

「そ、そんな訳ないでしょう！ 誰があんな無愛想で口が悪くて図体がでかくてむさくるしい男なんか、あんなの全然アタシの好みじ

やないんだから」

「でもさーあおいねえに振られた男の人の半分くらいはなよなよしてて頼りないって理由だったじゃない。その点クーくんは頼り甲斐があるタフな男だね？」

「クーくんの場合は頼り甲斐っていうよりも粗野なだけよ。おまけに姉さんには甘いくせにアタシや蘇芳には厳しいんだから」

「好きな人に優しくするのは当たり前じゃない、クーくんに優しくされたいってことはやっぱりあおいねえは……」

「うるさいわよ蘇芳！ いい加減にしないとこっちの彼に偏食の矯正でアタシが食事の度に泣いていたこととか、小学校の水泳の授業で着替えの下着を忘れて教室に戻れずにアタシが着替えを届けに行くまでずっと保健室に隠れていたこととかバラすわよ！」

「言ってる傍からバラしてるじゃん、あおいねえの馬鹿！」

結構年齢差のある姉妹、しかも妹は中学2年生で姉はおそらく二十歳を越えているとは思えない低レベルな言い合いを切島姉妹は繰り広げる。しかし口論の内容は低俗でも、語気の荒さや飛び交う怒号に籠っている熱気は相当の激しさがあり、喧嘩している本人たち以上に部外者の僕が気圧されてしまっている有様だった。

「しょうい照都大の学生の中でも優秀なアタシに向かって生意気な口を利いてくれるじゃない、蘇芳？」

「成績はいいけど頭は悪いってことをいい加減自覚しなよ、あおいねえ」

切島姉妹の間に一触即発のきな臭い空気が漂い始める。この会話だけでは葵さんが何を専攻しているのかは分からないけれど、御門^{みかど}市内にある日本屈指の難関大学照都大学に在籍しているというだけで彼女は相当学力が高いということは確かだった。

その成績優秀な姉に向かって頭が悪いと罵れる蘇芳の度胸を認めるべきか、はたまた身の程知らずというべきかはともかく、年下の子ども相手に対等の立場で喧嘩してしまう蘇芳の言うことにも一理あるようにも思えた。

「すみませーん」

「何か!？」

「ひいつ!？」

切島姉妹が目に見えない火花を飛ばしあっていると、店の入り口のドアが開いて朗らかな男の声が聞こえてくる。半開きになったドアから男が顔を覗かせてくると、切島姉妹はそちらに八つ当たり気味に剣幕を向けた。気性の激しい美人2人から鋭い眼差しを投げかけられて、男は思わず悲鳴をあげてしまう。

「兄貴……?」

「常葉…お前こんなトコで何やってんだ？」

「何って、行きつけの喫茶店で知り合いと話しているだけだけど…」

悲鳴をあげた男の声に聞き覚えがあつたので入り口の方に視線を向けると、入り口のドアに凭れ掛かるようにして僕の実兄で中学校の教員をしている雪人ゆきてがそこにいた。雪人兄貴と僕は不思議そうにお互いの顔を見つめあうが、僕と話して気を軽くした兄貴は店内に足を踏み入れてくる。

「お久しぶりです上鳥羽先輩。もしかしてこの子、先輩の弟さんなんですか？」

「ああ、そいつは俺の8つ下の弟で今高1の常葉っていうんだ。ところでそっちにいる子が君の妹さんだね？」

「はい、あたしの中学生の妹です」

「知ってるよ、だって俺は彼女の担任だからね」

「えっ!？」

うだつの上がない風体をしているものの、兄貴も葵さんと同じく照都大学の卒業生である。葵さんと兄貴は大学が同じなだけでなく、面識があるらしく葵さんは険しい表情を崩してやや謙った態度で兄貴に接した。

兄貴と葵さんが交互に自分の下の兄弟の紹介をしていくと、兄貴は信じられない発言をする。兄貴が蘇芳の担任をしていると初耳の僕と葵さんは、揃って素っ頓狂な声を挙げて兄貴と蘇芳の顔を見比べた。

S i s t e r s 了

6、Consultation

「カミオカ先生……」

「カミオカじゃなくて上鳥羽^{かみとば}。顔を合わせるのは1ヶ月半ぶりくらいだけど、元気そうでよかったよ」

「学校の名簿にある住所はまこねえの実家のはずなのに、どうしてあたしがここにしていると分かったんですか？」

「君の上のお姉さんと仲のいい知り合いから君がここにいるって話を聞いてね、それで尋ねてみたんだ」

「まこねえと仲のいい人ってカンナさんのことですよ、カミオカ先生が高校から付き合っている彼女の」

「え、まあそうだけど……とにかくこうして久々に面会できたんだ、君が学校に来やすくなるように話をさせてくれないか？」

僕の実兄である担任教師の名前も正しく覚えていないことから、どれだけ蘇芳が学校に関心を持っていないか明らかになった。学校の名簿上にある住所や電話番号では蘇芳に連絡がつかず、痺れを切らした兄貴は丹さんと仲のいい自分の恋人のつてを頼って蘇芳がここに潜伏していることを探り当てたらしい。

気付くと僕は世間の狭さを知ると同時に、担任のクラスに不登校の生徒を抱えた兄貴の苦労を垣間見る場面にたまたま居合わせてしまった。

「兄弟揃ってあたしを学校に行かせる説得をしようなんて、正直ちよつと鬱陶しいんですけど……」

「え、もしかして切島さんとお前は知り合いなのか？」

「店で顔を合わせた時に話をする程度にはね。それと一応丹さんと来栖さんから蘇芳さんの相談相手を頼まれているよ」

「じゃあ最近お前の言ってた少し変わった子って切島さんのことだったのか？」

「そういうことになるね」

「ちよつと常葉^{とぎわ}、少し変わった子ってどういう意味よ」

「言葉通りの意味だよ」

蘇芳は僕と兄貴の話を聞いて憤然とするが、むしろ少し変わったで留めていることに感謝して欲しいくらいだった。

「蘇芳、せっかくいらしてくれた先輩、いえ担任の先生にもコーヒーくらい出すのが礼儀じゃない？」

「別にコーヒーを出すのはいいけど……あたしは学校に行くつもりはないからね」

葵さんはついさっきまで蘇芳と子ども同士ののような口論を繰り広げていたことが嘘のように澄ました態度で、大学の先輩でかつ妹の担任である兄貴にコーヒーを1杯出すように言いつける。

蘇芳はコーヒーの用意をすることは億劫に感じていないようだったが、断固として登校する意思がないことを主張してキツチンに入っていた。

「散らかつておりますけどお席にどうぞ、先生」

「ゼミの後輩だった君に先生と言われるのはちよつと齒痒いなあ」

葵さんが席を兄貴に勧めたので、僕は奥に詰めて兄貴の座れるスペースを作る。兄貴はゼミの後輩だった年下の美人の前に、少し照れくさそうな様子で腰を下ろした。

兄貴が僕らのテーブルに同席して間もなく、携帯電話の着信音が鳴り始める。着うたや洒落た音楽ではなく初期設定の電子音を奏でていたのは、やはり流行に敏感そうな葵さんではなく兄貴の携帯電話であつた。

「もしもし…え、いや…そんなことないよ」

電話に出た途端、何故か兄貴の顔が引き攣り始める。微かに受話器から聞こえてくる相手の声はどうやら女性のものらしく、何やら兄貴を捲くし立てているような強い語気であつた。

「今は担任をしている切島さんの下の妹さんの所で面談をしているだけさ…うん、そう、確かに喫茶店にはいるけれど向かい合っているのは切島さんの上の妹さんで別にそういうんじゃないから…分かっているって、今度の日曜はちゃんと開けておくから、じゃ」

「…もしかして今の電話、カンナさんから？」

「ああ……どうしてカンナは俺が他の女性と一緒にのテーブルに座る度に毎回タイミングよく電話をかけてくるんだろ？　これだけ束縛されていたら、浮気なんか出来る余裕があるはずなのに……」

兄貴の発言の内容からさっきの電話は兄貴が長年付き合っている恋人からのものと検討をつけると、兄貴は酷く疲れた顔で弱々しく首肯する。

兄貴が高校の時から付き合っている彼女と僕も面識があり、その彼女は兄貴がこんな風に自分以外の女性と一緒に食事をしているだけでどこからか監視しているようにすぐに浮気をしていないかと電話をかけてくるのだった。

兄貴の彼女さんは悪い人ではないと思うけど、異常なほど束縛が強い所には兄貴だけでなく弟の僕も閉口している。心配しなくても兄貴が浮気を出来る甲斐性なんてあるはずなのに、どうして杞憂を募らせるのか理解できなかった。

「お待たせしました」

兄貴が彼女との電話で神経をすり減らしているうちに、コーヒーを淹れた蘇芳が兄貴の前にコーヒークップを置く。丁寧にソーサーを添えたカップに音を立てさせず、注がれた中身も揺らさずに置いた辺り、頑なに登校を拒んでいる学校の担任で名前すら碌に覚えていなくても、蘇芳は一応兄貴を客人としてもてなしていることは覗えた。

「ありがと……うん、仕事の疲れが溜まった体には沁みる一杯だね」
暖かな湯気と芳醇な香りを立てるコーヒークップを一口啜ると、兄貴は

心労の原因のひとつとなっている教え子に労いの言葉をかけた。

「どういたしました、それじゃあたしはこれで……」

「待ちなさい蘇芳、先生を放り出してどこにいくつもりかしら？」

「……ちょっとトイレに」

「上手いこといつてこの場から逃げ出すつもりでしょ、いいからここに座りなさい！」

「痛っ、あおいねえお願いだから髪は引っ張らないで！」

兄貴にコーヒーを出し終わると蘇芳は軽やかに身を翻して奥の扉から二階にある居住スペースに逃げ込もうとするが、妹の行動を目敏く察した葵さんは蘇芳の緩く編んだ髪を掴んで強引に彼女をその場に引き留める。

髪のを引っ張られた痛みで目に涙を浮かべながら、蘇芳は観念した様子で葵さんの隣に空いている奥の席に座った。

「すみません先生、ただでさえお手を煩わせているのに愚妹がこの期に及んで余計な迷惑をおかけしようとして」

「いえ、お気になさらずに……切島さんは妹さんのことをよく目にかけているみたいだね」

「はい、この子ったら小さい頃から落ち着きがなくて生意気で」

「自分のことを棚に上げてよくいうよ。斎^{いづき}さんもあたしのことをあ

おいねえよりは聞き分けがあるって……ごめん冗談です！」

僕や蘇芳の前では非常に横柄に振舞っていた葵さんは、大学の先輩でしかも今は妹の担任である兄貴の前では猫を被って上品そうに取り繕う。そんな葵さんの態度に蘇芳が辟易した様子で憎まれ口を利くと、葵さんはテーブルの下でこっそりとブーツの踵で妹の向こう脛を蹴飛ばして黙らせた。

「それじゃ切島さん、改めて話をさせてもらおうかな。ご家族や俺の弟とも話をして分かると思うけど、やっぱり君は学校に来るべきだと思う。君が学校生活を送る上で問題があるのなら、出来る限り俺も担任として解決出来るように協力するから」

「教科書通りの言い回しですね、先生」

「蘇芳、先生に失礼なこと言うんじゃないよ。先生、申し訳ありません」

兄貴は一呼吸置くと、自分のクラスにいる不登校生徒に通学を呼びかけ始めた。案の定その不登校生徒は担任の話に聞く耳も持たずに減らず口を利くと、生徒に代わってそのお姉さんが担任教師に謝罪する。

「確かに額面通りのことを言われても、本当に自分のことを心配してくれているのかって疑問に思うのは当然だよ。でも俺は担任としての義務感だけじゃなく、2人のお姉さんと知り合いつていうことも合わせて君の将来のためにも学校に来て欲しいんだ」

「兄貴……」

「先輩……」

兄貴は蘇芳の皮肉が正論であることを素直に認めると、今度は担任教師としての責任だけではなく彼女の身内と関わりを持つ一個人としての立場も合わせて説得を試みた。

珍しく熱の籠もった兄貴の一言に僕だけでなく、葵さんも感銘を受けたようだった。

「口先だけでは何とでも言えるし、例え先生がまこねえやあおいねえと仲良くてあたし個人とは担任と問題児ってだけじゃない。ほとんど無関係な人から心配されていると言われても、実感持てないよ」

しかし蘇芳が小声で呟いた一言は兄貴の説得にほだされかけていた僕だけでなく、彼女を囲んでいる葵さんや兄貴の胸にも深く突き刺さった。確かにまともに付き合いもない他人から心配されていると言われても、それに素直に感謝するのは難しい。まして自分が忌み嫌っている学校の関係者から言われれば尚更だろう。

図太く他人の言葉に流されないようで意外と繊細な所を蘇芳が持っている、何度か顔を合わせているうちに僕は薄々感じるようになった。思春期の硝子のように脆く鋭敏な蘇芳の気持ち慮ってか、兄貴も葵さんも彼女を学校に通わせようとする姿勢が引けてしまっているようだった。

「先生があたしのことを考えてくれるって言ってくれる気持ちはありがたいけど、やっぱり心からあたしのことを心配してくれると感じられるのはあおいねえやまこねえたち家族だけ」

「蘇芳……」

蘇芳は兄貴が自分のことを考えてくれたことに礼を言いつつ、自分の理解者はやはり身内しかいないと述べる。妹が信頼できる数少ない存在として葵さんの心境は単純に学校に行くよう勧めるだけの僕や兄貴よりもずっと複雑なはずであり、そのことは葵さんが戸惑いを浮かべている顔からも明らかだった。

「けど家族の中でもあたしのことを一番に分かってくれるのは、やっぱり本当のお父さんの忠将だよ。ただまさだって忠将は嫌なら無理に学校に通わなくていいって言ってくれたもの」

「それは小学校に入学したばかりの話でしょう、自分の都合のいいように忠将さんの好意を解釈するんじゃない！」

「人間のあおいねえに、吸血鬼の娘のあたしの気持ちを完全に分けるはずないよ」

「だったら姉さんはどうなのよ、アタシには出来なくても忠将さんと同族の姉さんならアンタの気持ちが分かるんじゃない？　そして姉さんもアタシや先輩と同じようにアンタに学校に行くように言うてるでしょう？」

場の空気は蘇芳の一言でしんみりした雰囲気になりかけたが、その潮流をぶち壊したのも彼女の発言だった。同居しているお姉さんの丹さんや実の父親だという忠将という人が吸血鬼であり、自分は吸血鬼の娘などという妄言を言い張る蘇芳に僕や兄貴は呆れ返る。

「ま、まこねえは吸血鬼の中でも人間ぽさが抜けてない変わり者だから……」

蘇芳は父親の同胞である丹さんが人間の兄貴や葵さんと同じことを言うのは、人間的な感覚を失っていない変わり者の吸血鬼だと苦しい言い逃れをする。

「ふざけたことばかり言っていないで明日から学校行きなさい、いいわね！」

「やだ、あたしを蘇芳と認めてくれるまで絶対に学校には行かない！」

一旦は静まった切島姉妹と蘇芳の担任である兄貴の三者面談は、面談が始まる前と同じく姉妹喧嘩に行き着いてしまう。息つく間もなく延々と罵詈雑言が葵さんと蘇芳の双方から吐き出され、僕と兄貴は暴言の嵐に圧倒されるばかりだった。

だが兄貴は年長者としての責任を感じて、切島姉妹の喧嘩の仲裁に入りどうにか2人を宥めることに成功する。だが切島姉妹の言い争いに收拾をつけると兄貴は氣力を使い果たしてしまい、結局それ以上蘇芳に登校を呼びかけることができないまま僕と一緒に帰宅の途に就いた。

「やつぱり駄目だったか…どうすれば切島さんを学校に來させることが出来るんだろう？」

「兄貴一人であの偏屈な奴をどうこうするのは無理だよ、丹さんたちに協力してもらえないんじゃないか？」

「いや、同級生だった長女の切島さんや彼女と同棲している来栖には夏休み前に相談している」

帰り道、兄貴とともに話すのは久し振りと思いながら蘇芳をどうやって学校に行かせるかを思案しあう。僕が兄貴一人で全部抱え込まずに、蘇芳を自宅に住まわせている丹さんと同居人の来栖さんに協力を頼むべきと提案すると、既に兄貴は彼女たちに助力を仰いでいたらしかった。

「丹さんたちに相談しても駄目だったの？」

「ああ。相談した当時から切島さんは学校を休みがちで、同級生だった切島さんのお姉さんや来栖もそのことを気にかけていた」

「そうなんだ」

「でも相談してからしばらくすると、来栖の奴が切島さんをパジャマのまま担いで学校まで運んでくるようになった。本人に行く気がないのなら、家のモンが無理矢理連れて行くしかないだろうって言っただけだったからさすがに来栖も根負けして無理矢理彼女を連れてくるのは止めた」

「…来栖さんも蘇芳も無茶苦茶だな」

屈強な体格をしている来栖さんが猫の子の首根っこを摘み上げるように蘇芳のことを担いでいる姿も、パジャマ姿で猫のような軽やかさで家に舞い戻ろうとする蘇芳の姿も容易に想像できた。そしてそんな珍妙な行いをする来栖さんも蘇芳も、甲乙つけがたい変わり者だと僕は結論付けた。

「そういえばさ、どうして切島さんのことをみんな蘇芳って呼んでいるんだろうな？」

「蘇芳ってあいつの名前だろ、親しい人が呼び捨てにするのに何もおかしいことはないじゃないか」

「違うぞ常葉、切島さんの名前は蘇芳じゃなくて真実^{まなみ}って言うんだぞ？」

「え、それってどういうことだよ？」

兄貴が至極当然のことを不思議がる方が奇異に思えた。でもてつきり名前だと思い込んでいた蘇芳という呼び名が彼女の名前でないことを聞かされると、僕は兄貴がそのことに疑念を抱いたことに合点がいく。

あいつの2人のお姉さんの名前はどちらも色に関係するものであり、蘇芳という名前もその繋がりで自然なものと思い込んでいた。しかし実の姉妹ではなく養子らしいあいつの名前がお姉さんたちの名前と関連性を持っているのは不自然に思えてくる。

蘇芳、いや厳密には切島真実と呼ぶべきあの風変わりな少女の素性を冷静に考えてみると、いくつも腑に落ちない点があることに僕は気付く。一体彼女は何者なんだろうと疑問に思い出すと、一笑にふしていた吸血鬼の娘という肩書きに少しだけ、いくつも0が連なった小数点以下の値が一桁増した程度に信憑性が増したような気がした。

6、Consultation（後書き）

2杯目のエピソードはこれにて終了。蘇芳の生い立ちや素性に微妙な伏線を張った状態で次のエピソードへの後引きをします。

3杯目のエピソードもお楽しみいただければ幸いです。

7、Boiling(前書き)

今回より3杯目のエピソードがスタートです。

蘇芳という少女の発言やその名前が全て彼女の脳内で生み出された虚言なのか、それとも部分的にでも事実が含まれているのかなどを注目しながらお付き合いください。

7、Boiling

12月、年の瀬を迎えて昼夜を問わずだいが気温は冷え込むようになってきた。四方を山に囲まれた盆地にある御門市みかどの気候は、夏はかまどの中のように暑く冬は冷蔵庫の中のように寒い。一年中、夏と冬を足して2で割った気温であればこの街はとも住み易くなるんじゃないかと季節が移ろうことに僕は思わずにはいられなかった。

「…今日は行くのやめておこうかな」

学校からの帰り道、行きつけの喫茶店の傍を通りかかると僕は一旦足を止める。吹き荒ぶ木枯らしに曝されて冷えた体を喫茶店でコーヒーでも飲んで温めたいという気持ちの半面、外気同様に自分の懐が非常に寒々しいことを鑑みて今日は家に帰るべきかと逡巡する。

「あの…この近くにラング・ド・シャって喫茶店ありますか？」

懐事情が寂しくなっているため諦めて家路に就こうと足を踏み出そうとした瞬間、車道側から遠慮がちに声をかけられる。横目でそちらを覗くと髪を短く切り揃えた近隣の中学校の制服姿の女の子が、少し物怖じした様子で僕に視線を向けていた。

「はい、この道を道なりに真っ直ぐ歩いていけば店の前に看板が出ているんで分かると思いますよ」

「そうですか、ありがとうございます」

僕が自分の右手にある路地を指し示しながら行きつけにしている

喫茶店までの道案内をすると、女の子は大きく体を前傾させて礼を言う。礼儀正しいという好感を抱くと同時に、彼女は髪を切り過ぎていると感じた。

「どういたしまして、それじゃ僕はこれで」

彼女は凛々しいというよりも可愛いらしい感じのタイプだし、あまり髪を短くすると痛々しさを覚えてしまうのは失礼だろうか。そう思いながら彼女のことを凝視していることに気付くと、僕は変に思われる前に慌てて視線を逸らしてその場を去ろうとする。

「すみません。もうラング・ド・シャに関することでもう一つお聞きしたいことがあるんですけど、よろしいですか？」

「为什么呢？」

「ラング・ド・シャで働いている人の中に女の子はいませんか？
中学生くらいの、綺麗な顔をした子なんですけど……」

一歩足を踏み出した途端、再び女の子に呼び止められて僕は危うく前方につんのめりそうになる。一呼吸置いて振り返ると、彼女は意外なことを訊ねてきた。

「中学生くらいの綺麗な顔の子って、蘇芳すおうのこと？」

「蘇芳？」

万年閑古鳥が鳴いているラング・ド・シャで見かける顔触れはほぼ固定されており、僕が知る限り店で見かける中学生くらいの女の子は一人しかいない。消去法で思い当たる人物の名前を僕は口にす

るが、その名前を聞いても女の子は聞き覚えがない様子で首を傾げるだけだった。

「えっと…君が訊いているのは店長の妹さんの切島真実きりしままなみさんのことかな？」

「はい、そうです。もしかして切島さんとお知り合いなんですか？」

「特別親しい訳じゃないけど、知り合いと言えば知り合いかな」

「私、切島さんと中学校で同じクラスの柊野はなのと言います。担任の先生に頼まれて切島さんの様子を伺いにこちらに参りました」

僕の思い当たる少女が身内から呼ばれている愛称ではなく、正式な氏名を告げて訊き直すと女の子が尋ねてきた人物が僕の知る少女と同一人物であることが分かった。

「兄貴の奴、自分の手におえなくなつた問題を生徒に押し付けるのかよ」

「えっ、上鳥羽先生かみとばの弟さんなんですか!？」

中学校の教員をやっている僕の兄貴は柊野さんが尋ねてきた少女の担任でもあり、その少女は長いこと登校拒否を続けている。

どうにか彼女に登校させようと兄貴も腐心していたが、彼女は未だに登校していないはずなのに兄貴の口からその話題を聞かなくなつて気にかけていた矢先、兄貴は自分の職務を放棄して生徒にその役目を押し付けたのだと感じる。思わず兄貴の無責任さを罵る一言を呟くと、柊野さんは耳聴く僕が自分の担任の弟であることを聞きと

めた。

「ええまあ…東九条中の教員をやっている雪人の弟で常葉とこわと言います。至らない兄が担任ですみません」

「いえ、そんなことないですよ。先生は本当によくやってくれています」

不甲斐ない兄貴に代わって弟の僕がその情けない有様を柊野さんに謝罪する。柊野さんは首を大きく横に振って自分の頼りない担任の弁護をしてくれた。名前すらまともに覚えていない不登校生徒を持て余している一方で、少なくとも表面的には自分を慕ってくれている生徒がいるところ、僕が思っているほど兄貴は駄目な教員ではないのかもしれない。

「ところで上鳥羽さん、切島さんは最近どうされているかご存知ですか？二ヶ月くらい前から切島さん学校を休んでいて、その間切島さんがどんな風だったのか私全然分からなくて……」

「あいつに会うのにそんなに身構えなくても大丈夫ですよ。この間も遅くまで街をぶらついていてお姉さんたちに怒られても、ちっとも反省しないで開き直ってましたから」

柊野さんが不登校をしている蘇芳への接し方に不安を募らせていたので、僕は余計な気遣いは無用と助言した。深刻な悩みに苛まれて学校を休むしかない状況に追い込まれている人間が行きずりで出会った女子高生と意気投合して夜中までカラオケをしているはずがなく、一般的な不登校のクラスメイトに対して必要な配慮など一切不要だと柊野さんの肩の荷を軽くしてあげようと思った。

「失礼ね。あれだけクーくんに怒鳴られて、家出したんじゃないかと心配してたまこねえに泣きつかれたら少しは反省したわよ」

「蘇芳!？」

柊野さんが兄貴に押し付けられた妄言を垂れ流す自由気ままな同級生の相手をしなければならぬ境遇に同情すると、批判の槍玉に挙げた少女の声がどこからか聞こえてくる。

すると向かい側の歩道から道路を横断して、肩に大きなエコバックをかけた緩く髪を編んだ少女がこちらに近づいてきた。兄貴が担任している柊野さんと同じクラスの不登校生徒で、ラング・ド・シヤの女主人をしている丹あこさんの妹の蘇芳だ。

「ねえこっちの人は誰、常葉のカノジョ？」

「この人は学校を休んでいるお前のお見舞いに来てくれたクラスメイトだよ!？」

「クラスメイト？ あゝそういえばなんか見たことあるかも」

蘇芳は怪訝そうな顔で柊野さんの顔をまじまじと覗きこむと、ようやく彼女のことを思い出したらしく手を叩く。碌に学校に行っていないとはいえ、様子を見に来てくれたクラスメイトに気付かないなんて無礼な奴だ。

「私、柊野だけどくし振りだね切島さん、元気だった？」

「柊野… ああミチルか。うん、元気だからこうやってお使いに出かけているよ」

「名前を呼び捨て、仲のいい友達のことが分からなかったのか!？」

「いえ、切島さんとは今年同じクラスになるまで付き合いはありません」

蘇芳が柊野さんの名前を呼び捨てにすると僕は彼女のあまりの不遜さに眉を顰める。しかし柊野さんは蘇芳と知り合ったのは今年度同じクラスになってからであり、特別親しい仲ではなかったと首を横に振る。

「じゃあなんで蘇芳は君の名前を呼び捨てに？」

「同じクラスにさ、この子にいつも付きまとっている子がいてことあることにミチル、ミチルって呼んでいるのを聞いて名前は覚えたから」

なるほどそういうことが、苗字よりも名前の方が耳馴染みがあるのなら柊野さんの苗字ではなく名前を連想するのは不可解ではない。

「それでミチルはどうしてここに？」

「どうしてって、ただ切島さんのお見舞いに来ただけよ」

「なんで、あたし病気じゃないのに？」

蘇芳は健康体の自分の見舞いになぜ柊野さんがやってくるのか不思議そうだった。病氣の見舞いじゃなくて、不登校をしているお前の様子を見に来ただけだよとつっこみたかったが、場の雰囲気が悪くしそうなだけなので黙っておくことにした。

「まあなんでもいいや、ここまでご足労いただいた訳だしコーヒーくらい奢るわ。うちまで案内するからついてきてよ、ミチル」

「あ、はい……」

「それから常葉、ミチルの相手をしなくちゃいけないからこれ持つて」

「え、ちよつと!？」

ラング・ド・シャは蘇芳の自宅ではなく厳密には彼女の姉とその恋人の家であったが、蘇芳は寝起きしている家まで柊野さんの案内することを申し出る。柊野さんは不登校をしている割に友好的な対応を見せる蘇芳に戸惑いながら生返事をし、蘇芳は適当な口実を見つけたのを悪用して大量の食品が押し込まれた買物袋を僕に押し付けてきた。

今日は寄らずに直帰するつもりだったのに、結局ラング・ド・シャに立ち寄る破目になってしまったことを皮肉に思いながら、僕は蘇芳と柊野さんの後に続いて店まで歩く。

しかし肩が千切れそうなほどの重さがある買出しの品を店まで運んだ礼に、店の女主人である丹さんからコーヒーを1杯奢ってもらったことは儲け物だった。廃棄寸前の残り物であっても寒い中重たい荷物を担いでここまで来た甲斐はあったと、温かなコーヒーを僕はありがたくご馳走になる。

相変わらず店の客入りの乏しく、僕と柊野さんの他に客はいない。カウンターでコーヒーを啜りながら僕は奥の席に差し向かいで座っ

ている蘇芳と柊野さんの様子を一瞥した。

「おいしい」

「そうでしょ、見た目はぱつとしなくてもまこねえの作る料理は絶品なんだから」

コーヒーと一緒にお茶菓子として出されたフルーツケーキを一口食べると、柊野さんは口の中に広がる程よい甘さによって少し固い面持ちだった表情を和らげる。一言余計なことを言いながら、蘇芳はお姉さんの料理を自慢げに絶賛した。

「…切島さんはお姉さんのお店の手伝いをするために学校を休んでいるんじゃないよね？」

「違うよ、あたしが学校を休んでまで手伝わなくちゃいけないほどここ忙しくないもん」

遠慮がちに柊野さんが切り出した話に、蘇芳は素っ気無い調子で首を横に振る。

「病氣している訳じゃないし家の手伝いをしている訳でもないのなら、どうして学校を休んでいるの？ 自分が委員長をしているから持ち上げる訳じゃないけど、ウチのクラスはみんな仲いいしクラスの雰囲気そんなに悪くないと思うけど……」

「だってあそこは本当のあたしでいられない場所だもん」

「そんなことないよ、みんなちゃんと切島さんのことを分かってくれるよ」

「そういうミチル自身が、あたしを切島さんって言ってる時点で本当のあたしを分かっていない」

「えっと…それじゃ真実ちゃんって呼んだ方がいい？」

「あたしは真実じゃない、その名前で呼ばれるくらいなら他人行儀に切島さんって呼ばれた方がずっとマシよ！」

柊野さんは蘇芳が何故学校に来ないのかという理由を聞き出そうと試みるが、蘇芳はいつもの屁理屈を並べるばかりで取り付く島がない。拳句の果てに柊野さんが親しみを持てるように下の名前で呼ぶことを提案すると、蘇芳は戸籍上の名前を自分の名前ではないと言いつけて相手を怒鳴りつける始末だった。

「う、ごめんなさい……」

「柊野さんが謝ることないよ、むしろ謝らなくちゃいけないのはお前の方だ」

蘇芳は切れ長の目を陰しく細めて本気で怒っているらしく、柊野さんはその剣幕に気圧されて反射的に謝罪の言葉を述べる。しかし彼女たちのやり取りを見ていても、蘇芳に非があるのは明らかで柊野さんがあいつに謝るのは間違っている。

いてもたってもいられなくなった僕は柊野さんの擁護をするために、蘇芳と彼女の間に割って入った。

「はあ、なんであたしがミチルに謝らなくちゃいけないのよ？」

「ふざけるのも大概にしろよ。せっかく柊野さんが苗字じゃなくて名前で呼んでくれるように気を利かせてくれたのに、自分が真実じゃないなんてどういふつもりだ？」

「どうもこうも、あたしは真実じゃないってだけよ。役所の戸籍に登録されている名前は現世で生きていくために必要な便宜的なもので、あたしの本当の名前は蘇芳なんだから」

蘇芳は怒りの矛先を柊野さんから僕に変えて、不機嫌そうな顔で睨み付けてくる。蘇芳に邪険な目つきで見られたのは初めての経験であり、年下の女の子とは思えないくらい蘇芳の眼光には眼力があつた。しかしここで圧倒される訳にもいかず、僕は毅然とした態度で柊野さんへの謝罪を蘇芳に求めた。

すると蘇芳は訳が分からないことを口走って自分の正当性を主張してくるが、今の僕にあいつの詭弁を聞き流してやるだけの寛大さはない。このへんで一度ガツンと言っておかないと、ますます蘇芳を付け上がらせることになってしまう。それは周りの人間だけでなく、あいつ本人のためにもならない。

「何が現世で生きていくために必要な便宜的な名前だよ、お前自身がどう思おうと公的には切島真実がお前の名前だ。自分が吸血鬼の娘だとか本当の名前は蘇芳だとかっていう作り話の世界に浸ってないでいい加減目を覚ませよ、この大ボラ吹き！」

蘇芳を強制的に現状と向き合わせるため、僕は彼女が嘔くもいている全てが妄想でしかないと言蹴する。自分でも言い過ぎたと感じていたが、これくらい強気で接しないといつまで経っても蘇芳は学校に戻りはしない。だから心を鬼にしてきついお灸を彼女に据えることにした。

僕に一喝されて現実に引き戻された蘇芳は俯いて、自分が抛り所
にしていた絵空事を粉碎されたショックに呆然とその場に立ち尽く
している。吐き通してきた妄想が崩れ去った喪失感に苛まれている
のか、蘇芳の手は忙しく震えて宙を彷徨っている。

そして虚空を泳いでいた蘇芳の右手が留まった場所は僕の左頬だ
った。拳を固めた蘇芳は逆上した勢いに任せて、思い切り僕の顔を
を殴りつけてくる。目の前に星が瞬いたように感じながら、蘇芳の
右ストレートをモロに食らった僕はなす術もなく床に倒れこんだ。

「ウソなんかついてない！ あたしは200年近く生きている吸血
鬼の忠将の娘で、蘇芳ただまって名前は忠将と死んだお母さんが一緒に考
えてくれた名前よ！ これは本当の話なのにどいつもこいつも笑い
話にしか思ってくれない。結局あんたもそうやってあたしの言っ
ていることを信じないで、馬鹿にするだけの奴らと一緒に。そんな
あんたは二度とあたしの前に顔を出すな！」

床に倒れ臥して視界が暗転したまま、蘇芳は嗚咽交じりの怒号を
僕に浴びせてくる。吸血鬼の娘という点はともかく、蘇芳という愛
称の由縁はありえない話ではないと朦朧とした意識の中で僕は感じ
る。ここまで本気で言われると、蘇芳の話は全部嘘と言い切ってし
まったことに後ろめたさを僕は覚え始めた。

「蘇芳！」

「切島さん！」

駆け足で遠ざかっていく足音と共に、蘇芳の上のお姉さんの丹さ
んと柊野さんが銘々蘇芳のことを呼び止めようとする。しかしバタ

ンと荒っぽくドアが閉められる音が店内に響くと、階上でたたたと大きな足音がした。

どうやら僕を殴り倒し絶交を告げた蘇芳は、店の2階にある居住区画に駆け込んでしまったらしい。蘇芳を会心させるどころか火に油を注いだだけの結果を思い、僕は強打された痛む頬を歪めて苦笑する。

やっぱり喧嘩の仲裁とか思い直させるための説教とか、柄にもないことをすると碌な目に遭わないみたいだ。

B o i l i n g 了

8、Disclosure

「ごめんね常葉くん、蘇芳のことは後できつく叱っておくから」

「いえ、僕も強く言い過ぎましたから」

蘇芳に殴り倒された後、その場に居合わせた丹さんと蘇芳の同級生の柊野ひらきのさんの手を借りて僕は引き起こされると空いている客席に座らされた。蘇芳に思い切り殴られて腫れ上がった頬に丹さんからもらった氷嚢を当てながら、僕は強がり言う。

小さい時から平和主義者だった僕にとって他人から顔を殴打されたのは今日が始めてのことであり、経験のない激痛を堪えるのが精一杯で自分をこんな目に遭わせた蘇芳を恨む気持ちも湧いてこなかった。

「切島さんのお姉さん、切島さんの言っていたことは本当のことなんですか？」

僕の向かいの椅子に所在なさげに座っていた柊野さんが、躊躇いがちに丹さんに先ほど蘇芳が口走ったことの真偽を訊ねる。

自分は忠将ただまさという200歳くらいの吸血鬼の娘だという話とはともかく、蘇芳という名前は忠将というひとと死んだ母親と一緒に考えてくれたということは僕も初耳であり、丹さんがその問いにどう答えるのかと横目で様子を覗く。

「蘇芳って名前を忠将さんとあの子の亡くなられた産みのお母様が一緒に考えられたのは本当のことよ。ちょっとイレギュラーなこと

があつて戸籍に登録されている名前は眞実まなみになつてゐるけれど、わたしたち家族は忠将さんたちが考えた名前で親しみを込めてあの子のことを蘇芳と呼んでいるわ」

「切島さんのお母さんはお姉さんのお母さんじゃないんですか？ それに忠将さんってひとは誰なんです、話を聞いていると少なくともお姉さんのお父さんではないみたいなんですけど？」

「えっと、どう説明しようかしら……」

「蘇芳は切島の家の子で丹たちとは血の繋がりはない。蘇芳の産みの母親と入籍はしてなかったが、切島家の娘になる前あいつを育てていたのは忠将さんだ。だから蘇芳にとつて事実上の父親は忠将さんってことになる。蘇芳の出生に纏わる話を掻い摘めばこんなトコだろ？」

柊野さんから重ねて訊ねられた質問への返答に丹さんが言葉を詰まらせると、二階の居住区画に通じる店の奥に設けられた扉が開いて巨漢がフロアに姿を現した。

「うん、だいたいそんな感じ。わたしの代わりに説明してくれてありがとう」

「そんなことよりもよ、出かける支度してたら蘇芳の奴が泣き顔で部屋に駆け込んできたぞ？ あのお転婆があんな風になるなんて何があつたんだ？」

濃い陰影を刻む彫りの深い顔立ちに筋骨隆々として屈強な体軀をした男が奥から出てくると、彼に何かされた訳でもないのに柊野さんは威圧感を覚えて身を竦ませる。

しかし丹さんはこちらに歩み寄ってくる強面の偉丈夫を気さくに
出迎え、彼も多少は蘇芳の異変を気にかけた様子で階下での出来事
について丹さんに聞き返した。

「学校の友達と常葉くんと話している時に、あの子の生い立ちのこ
とでちょっと話が拗れちゃってね。でも自分があまり触れて欲しく
ない話題だからって、問答無用で相手のことを殴るのはいけないわ」

「あゝだから上鳥羽弟が顔に氷嚢当ててるのか、八つ当たりされて
ご愁傷様だな」
かみとは

丹さんからついさっき起こったイザコザの顛末を聞かされると、
僕らの近くに立ち止まった彼は僕が腫れた頬を氷で冷やしている理
由に合点がいつて首を縦に振る。

「女の子のパンチ一発でのされちゃ格好つきませんよ…それよりも
来栖さん、蘇芳の奴本当に泣き顔だったんですか？」
くるす

「ああ、顔をくしゃくしゃにしかめて泣くのをなんとか堪えたまま
部屋の中に飛び込んでいった。ところで上鳥羽弟、お前あいつに何
を言った？」

丹さんが高校時代から付き合っていて現在は店の二階で同棲して
いるという男性、来栖さんは当初痛ましそうに僕を見ていた目を細
める。来栖さんから無言の圧力を受けて、僕は背中に冷や汗が流れ
るのを感じた。

「吸血鬼の娘だとか蘇芳が本当の名前で真実は便宜上仕方なく使っ
ている名前だとかいうあいつの話を全部嘘だって言い切りました。

そしたら思ったよりもあいつのことを傷つけちゃったみたいで…本
当にすみません」

「阿呆、謝る相手は俺じゃねえだろう」

「そうですね…今からちゃんとあいつに謝ってきます」

「止めとけ、今お前があのだじゃじゃ馬の前にいっても怪我を増やす
だけだ。ほとぼりが冷めるまで顔を合わせないことがお互いのため
だ」

僕は素直に蘇芳に言い放ったことを来栖さんに告白する。来栖さ
んは意外と冷静に僕の話聞いてくれて、今下手に蘇芳の前に僕が
顔を出しても和解するどころか彼女を余計に怒らせるだけと僕をこ
の場に留まらせた。

「じゃあ僕はどうすれば……」

「今日は帰った方がいいわね。蘇芳の機嫌がよくなってきたら、わ
たしから常葉くんの家に連絡するから」

「分かりました……」

今の僕が傷心の蘇芳に出来ることは何もなく、黙ってラング・ド・
シヤを去ることが最善の選択であるようだった。

「あの…どうして切島さんはお姉さんたちの家の養子になったんで
すか、なんでその忠将って人と一緒に暮らさないんですか？」

まだ頬の腫れが引いていないので氷嚢を借りたまま帰ってよいか訊

ねようとすると、それまで黙り込んでいた柊野さんが口を開く。彼女が口にした質問は僕も前々から疑問に思っていたことだった。

切島姉妹や彼女たちと懇意にしている来栖さんの間で交わされる会話の端緒から、おぼろげに蘇芳が切島家の養女になった理由の推測は出来ていたけれど、明らかかなことはまだ聞かされていない。蘇芳、公的には切島真実という名前の少女に関する詳細を知っておいた方が、機嫌を損ねさせてしまった彼女に侘びる際にいいのではないかと感じて僕は聞き耳を立てた。

「忠将さんはその…夜のお仕事をされている人なの。忠将さんは亡くなられたお母様の代わりにあの子のことを育ててこられたけど、自分と一緒に暮らすことが蘇芳の成長に悪影響を与えるんじゃないかって心配されていたわ。忠将さんは蘇芳を心から愛していたし、蘇芳も彼によく懐いていた。蘇芳を手放すべきかどうか悩んだ末に、忠将さんは知り合いだったわたしの父の家で蘇芳のことを育ててほしいと頼んできたの。そしてわたしの父が彼の申し出を承諾して、養子としてあの子をウチに引き取ったわ」

丹さんは時折言葉を慎重に選ぶために考え込みながら、蘇芳が切島家に引き取られるまでの過程の概要を語る。丹さんが述べた蘇芳の生い立ちの大筋は僕が想像していた通りのことだった。

「でも切島さんは忠将さんってひとが吸血鬼って言っていましたよ？」

「…それは忠将さんが普通の人とは反対に昼間眠って夜仕事をしているのかと幼い蘇芳に訊かれた時に、冗談半分で答えたことみたいよ。忠将さんは生真面目なひとで彼が嘘を吐くはずないと蘇芳は幼心にも分かっていたから、大きくなった今でもそれが嘘だと思っていないみたい」

なるほど吸血鬼のように昼夜逆転した生活を送っているから、忠將ってひとは幼い蘇芳の素朴な質問に対して面白半分になんか返事をしたんだ。誤算だったのは普段嘘や冗談を言わない真面目な人が、珍しく茶目っ気を見せたせいで思い込みの激しい子どもはそれを真に受けてしまい今に引き摺っていることだろう。

蘇芳の突飛な発言の真相としては納得いく説明だったのに、何故か丹さんが後ろめたそうな顔をしているのが不可解だったが、僕は蘇芳の生い立ちに関する話を噛み砕くことが出来て満足した。

「…子どもの時に信じたのは分かりますけど、中学生にもなれば普通はそれが嘘だって分かりますよね？」

「昼と夜が入れ替わった大変な仕事をしている忠將さんに育ててもらったことが、蘇芳にとっては大切なアイデンティティなんだよ。たぶん自分が吸血鬼の娘だと主張することで、あいつは夜の仕事をしているひとでも立派に子どもを育てられるってことを証明して、偏見を持っている連中の鼻をあかしてやりたいんだよ」

柊野さんは何故蘇芳が誤解を招くような発言を繰り返しているのかという理由に溜飲が下がらないようだったが、この場にはいない蘇芳本人に代わって来栖さんがあいつの心中を察して代弁する。

来栖さんが推測した蘇芳が再三口に行っている見え透いた嘘の裏にある彼女の想いを耳にして、柊野さんは蘇芳が単純に奇をてらっているのではないと悟ったらしい。そして柊野さんは徹つい風貌をした来栖さんへの畏怖ではなく、奇矯な言動の裏にある蘇芳の本心を看破した来栖さんに畏敬の眼差しを向けるようになった。

「クーくん……」

「クーくん！？ す、すみません…でも驚いちゃってつい……」

だが厳かになりかけた雰囲気は丹さんの眩きによってあっけなく霧散してしまう。どう考えても強面で恵まれた体格をしている来栖さんに不釣り合いな可愛らしい愛称を聞き、意図せずに柊野さんはその愛称を反芻してしまう。

「…丹、いい加減その呼び方止めてくれないか？」

「ちょっと子どもっぽいかもしれないけど、やっぱりクーくんって呼ぶのが一番しっくりくるよ」

決まりが悪そうな顔で俯いた来栖さんは丹さんのことを一瞥するが、丹さんは即座に彼の懇願を取り下げた。170cm近くある女性にしては比較的長身の丹さんよりも上背は頭1つ分高く、体の厚みは格段に上回っている来栖さんだったが、丹さんには頭が上がりないらしくそれ以上呼び名に関して訂正を求めようとはしなかった。

「お前ら姉妹が俺をガキっぽい呼び方してるから、蘇芳が中学生になってもお前や葵をガキみたいに甘ったるい呼び方をしているんじゃないかねえか？」

「別にわたしは蘇芳からまこねって呼ばれるの嫌じゃないよ。葵もあおいねって言われるの嫌がってないみたいだし」

「葵は言い方を直させるのを諦めたんだよ。大学に入った頃、躍起になって蘇芳に呼び方を変えさせようとしてたじゃねえか」

「そうだっけ、覚えてないわ。それに呼び方に拘ったせいで関係が崩れる方が馬鹿らしいじゃない？」

「それでも体面ってモンがあるだろう……」

来栖さんは子どもっぽく呼び名をされていることに愚痴を零すが、丹さんは爽やかな笑みを浮かべて彼の言い分をさらりと聞き流す。来栖さんは未練がましく恨み言を言いながらも、やはり丹さんに強くは出られなかった。

「呼び名に拘るせいで関係が崩れる方が馬鹿らしい……確かにその通りですね、丹さん」

「…常葉くん？」

丹さんが何気なく呟いた一言は僕の胸に深く突き刺さった。そうだよ、呼び方なんかには振り回されて険悪な関係になることはとても愚かしいことじゃないか。丹さんの言葉を復唱した僕に、丹さんと来栖さんは怪訝そうな目を向けてくる。

「ところで来栖さん、最近お店にいないことが多いですけど、これくらいもしょうちゅうお店にでない感じですか？」

蘇芳との関係がこのまま切れてしまうのは寂しい気がして、関係の修復に何かいい考えはないかと僕は思索を巡らせる。そしてふと浮かんだアイディアを出してみようと、僕は最近不在がちな来栖さんに積極的に話しかけた。

「副業でやってる実家の仕事が忙しいからしばらくは店に出たり出なかったりを繰り返すと思うが、それがどうした？」

珍しく能動的に会話を図ってくる僕に少々違和感を覚えているような顔で、来栖さんは期待した通りの返事をしてきた。

「丹さん、来栖さんがいないままお店を開けるの大変じゃないですか？」

「そうね…やっぱりお昼やお茶の時間、それにお休みの日はわたし独りでは手が回らないことがあるわね」

「そうですね、そこでお2人に1つ提案があるんですけど……」

自分でこんなことを申し出るのは意外でらしくないと感じながら、僕は何かに突き動かされるように丹さんと来栖さんに思いついた提案を告げる。

突然こんな提案をしたところであっさりと却下されても不思議ではないと思っていたが、予想に反して店の女主人の丹さんも彼女に付き添ってキッチンの仕事をしている来栖さんも好意的に話を聞いてくれた。

「常葉くんのお話を受けてもいいかな、クーくん？」

「ああ、これで俺も後ろ髪を引かれずに副業に専念することができる」

「それじゃ常葉くん、お願いしてもいいかしら？」

「はい、喜んで」

丹さんたちから幸先いい返事をもらえると、僕は会心の笑みを浮かべて彼女たちに頷き返す。前途多難になりそうだけど、これで蘇芳との間に入った亀裂の修復に向けて一歩前進できたように感じた。

D i s c l o s u r e 了

9、Working

週末の昼時、普段はまばらな客入りのラング・ド・シャもテーブル席が埋まるくらいには繁盛している。開店してからしばらくは一組も客が入らなかったで時間の流れが非常に緩慢に思えたが、昼前から客が入りだすと途端に店内の空気が変わって非常に慌しいものになる。

仕事内容の詳細は不明だが副業のために店を休んでいる来栖さんに代わって調理の担当をしている丹さんまこは、いつものおっとりした物腰とは打って変わって機敏にキッチンの中を往来していた。

客席で見ていた時は造作もない作業をしているように思えていたラング・ド・シャの切り盛りが、視点が変わると非常に忙し_く的確な行動が要求されるのだと感じる。

「まこねえ、独りじゃ大変だろうし手伝おうか？」

店の2階に居候している丹さんの妹で中学生の蘇芳が、居住区画に通じる店の奥の扉から顔を覗かせる。不用意な発言で蘇芳の機嫌を損ねて絶交を告げられて以降、彼女の顔を見るのは始めてだった。

横目で垣間見た蘇芳の顔は絶交を宣告される前と変わっていないように思えて、僕の吐いた暴言を彼女が深刻に引き摺っていないようなことに胸を撫で下ろす。

「大丈夫よ、人手は足りているから」

「クーくんがいないんだから今お店にはまこねえしかないでしょ

「？」

「ええ、でも今日からバイトの子に入ってもらっているの」

「バイト？」

不在の来栖さんの穴埋めをしているバイトの姿を求めて蘇芳がドアの隙間から店内を覗き見ているうちに、僕と彼女の視線が重なった。

「…バイトってそいつのこと？」

「そうよ。働くのは今日が初めてなのに、常葉^{とぎわ}くんはよくやってくれるから助かるわ」

「家で洗い物とか飯の支度をさせられていますからね、こういうのは慣れてるんですよ」

蘇芳に剣呑な眼差しで睨まれる一方で、丹さんはバイト初日にしては僕の働きぶりはいいと褒めてくれる。僕は丹さんの労いの言葉に謙遜しながら、客のテーブルから空いている食器を下げてキッチンへと運んでいった。

「なんでバイトなんか雇うのよ、人手が要る時はあたしが手伝えばいいじゃない！」

「中学生にお店の仕事をさせる訳にはいかないでしょ？」

「あたしを働かせれば無駄なバイト代もかからないのよ、赤字続きのお店にはそっちの方が得じゃない！」

「家族に手伝わせると馴れ合いで半端な仕事になりそうだもの、バイトでもお給料を払う以上はしっかり働いてもらっわ」

「だったらあたしをバイトで雇ってよ」

「駄目よ、戸籍上は生産年齢人口に含まれない蘇芳を雇ったら法律違反になっちゃうもの」

蘇芳は店の中に入ってくるなり、僕がラング・ド・シャでバイトしていることに文句をつけてくる。しかし蘇芳が僕をクビにして代わりに自分を働かせるように再三要求しても、丹さんはやりわりとした口調でしかし内容は厳しくそれを拒否した。

「とにかく常葉くんをバイトに雇った以上、あなたにお店で働いてもらう必要はないわ。お客様としてここに来たんじゃないのなら、おとなしく上に戻りなさい」

「…わかったわよ。それじゃ、あたしを追い出してまで雇ったバイトがどれだけ使えるかお客の立場から審査してやろうじゃないの」

丹さんからこれ以上ラング・ド・シャで自分を働かせるつもりはないことを宣告させると、蘇芳は自分の代わりに入れたバイトの僕の仕事ぶりを吟味すると答えた。空いているカウンター席に少々もったいぶった態度で腰掛けると、棘のある眼差しで傍らに控えた僕を一瞥する。

「いらっしやいませ。メニューはお手元にございますので、ご注文が決まり次第声をおかけください」

「表情が硬い、それからお冷とおしぼりを置く場所が遠過ぎ」

お冷を注いだグラスと使いきりのウェットティッシュを持っていくと、蘇芳は細かい点に難癖をつけてきた。バイト初日なんだから仕方ないだろうと思いつつ、これから仕事を続けていく上で貴重なアドバイスとして受け止めることにした。

店のユニフォームとして支給された、胸元に舌を出した猫のイラストが印刷されたエプロンのポケットからメモとペンを取り出すと蘇芳に指摘されたことを即座に書き留める。

「店が混み合っている時にフロアでぼうっとするな、メモは暇になつてから書け」

「ちよつと蘇芳、常葉くんは同じミスをしないようにあなたに注意されたことを忘れないように書き取っているのよ。なんでもかんでもいちゃもんをつけるのはやめて」

「…すみませんでした」

丹さんは僕が仕事に前向きに取り組んでいるからこそ敢えてこの場でメモを取ったのだと蘇芳を咎める。だがピークは越えたとはいえまだ店の中はお客様で賑わっており、メモを取る暇があれば代えのお冷の準備でもしておくべきだったかもしれない。

僕は真摯に蘇芳の忠告を聞き入れることにして、彼女に対して頭を下げて謝罪した。

「すみませんでしたじゃなくて、申し訳ありません。それとお辞儀する角度が浅いし、頭を起こすタイミングが早くてなんかおざなり

に見える」

しかし僕の謝意に対しても蘇芳は執拗に文句をつけてきた。丹さんや来栖さんといった常勤のスタッフや年長のお客さんから言われるならともかく、年下の中学生に言われると無性に腹が立った。僕は平身低頭の姿勢を保ってはいたものの、生意気な口を利く蘇芳の態度に苛立ちを覚えて歯軋りをしてしまった。

「ま、バイトの高校生、しかも今日働きだしたばかりのペーペーじゃ仕方ないわね」

そろそろ堪忍袋の緒が切れ掛かっている自分をどうにか抑えようとしていると、蘇芳は若い新人のバイトでは避けがたいミスだと態度を軟化させる。意外な発言に僕は思わず視線を上げて、蘇芳の顔を見上げた。

「ちょっと突っ立ってないでお冷のおかわり持ってきてよ。お昼はかきいれ時なんだから遊んでいる余裕なんかないのよ？」

「はい、すぐにお持ちします」

つつけんどんな口調は変わらなかったが、少しだけ蘇芳が僕を見る目が柔らかくなったように感じた。調理を終えたオーダーが上がつて、これから何組かに配膳しに回らなければならず蘇芳の言う通り、動きを止めている暇などない。

僕は蘇芳に愛想よく返事をする、溜まってきた仕事を捌きにかかった。

* * *

午後1時を回ると次第に客足が引いていき、再び店内に静寂が訪れる。戦場のような慌しさ、というのはいささか大仰だとは思うけど、仕事初めに迎えた最初のランチタイムは僕が知る限りではラング・ド・シャにしては繁盛した方であり、正直に言くと僕はたった数時間の労働でかなり疲れていた。

「ねえ、ブレンドでいいからコーヒーお願い」

フロアが落ち着いている、というか蘇芳以外に客がいない間に、洗い場に溜めてしまった食器を片付けようとしていると蘇芳がカウンター越しにコーヒーを注文してくる。

「畏まりました。丹さん、ワン・ブレンド入ります」

「まこねえじゃなくて常葉、あんたにコーヒーを淹れてほしいの」

この店のコーヒーは汲み置きではなく、1杯ごとに淹れてお客に出している。今日のところは配膳と洗い物、それと簡単な調理補助だけでいいと言われていたので、丹さんにブレンドコーヒーを淹れてもらえるよう頼む。すると蘇芳は丹さんではなくて、素人の僕にコーヒーを淹れるように注文してきた。

「でも僕はまだ……」

「あたしはあんたの淹れたコーヒーを飲みたいの、客の注文に口答えするな」

働き始めたばかりの自分がコーヒーを淹れられないと蘇芳に侘びようとするのを、彼女は立場を盾にして強引に要求を押し通そうと

して遮る。

「丹さん、どうします?」

「いいんじゃない、他のお客様よりも顔見知りでわたしの妹なら初めのドリップを少しは気楽にできるんじゃない?」

丹さんに助け舟を求めるように僕は視線を投げかけるが、彼女はあっさりと蘇芳の注文を聞き入れることを承諾した。

「分かりました、ご注文された通りコーヒーを用意させてもらいます」

蘇芳がどんな意図で僕のコーヒーを飲みたいと言ったのかは定かではないが、お客さんからの注文でかつ雇い主の丹さんが了承したのだから僕はそれに従うしかなかった。

自宅では何度もコーヒーを淹れたことがあるけれど、商品としてお客さんに出すのは初めての経験であり、僕は丹さんの指導に従いながらコーヒーを淹れる準備を始める。

いくら1杯ずつ抽出するといっても、毎回豆を挽くのは面倒なのである程度の量は予め挽いておいてすぐに淹れられるように気密性の高い容器にストックしてある。容器から一杯分の量を電子秤で計量しながら取り出すと、ドリップパーにセットしておいたペーパーフィルターに入れる。

自宅ではフィットしやすいようにフィルターを濡らしてドリップパーにセットしていたが、それでは熱の逃げ場が失われてしまい豆の風味が劣化してしまうリスクがあるということでラング・ド・シャ

では乾いた状態でフィルターをドリツパーにセットしていた。

フィルターに粉末状になったコーヒー豆を投下すると、ドリツパーを抽出されたコーヒーを溜めるガラス製のサーバーの上に重なる。コーヒーを抽出する準備を整えた後、フィルター内に収まったコーヒー豆の中心にスプーンでお湯を注ぐための窪みを作る。

「…あんたはさ、やっぱりあたしのことを嘘つきだと思ってる？」

ポットから内部のお湯が沸騰していることを告げるリズムミカルな音が聞こえてくると、僕はコンロの火を止めるために取っ手に手を伸ばした。すると蘇芳が僕らの不和の原因になった時の話を蒸し返してくる。

「それは……」

「いきなり吸血鬼の娘とか言われても普通の人は信じるはずがないよね。でも陰陽師の子孫のあんたなら、そんな話にも免疫があつてまともに話を聞いてくれるかもってあたし期待してたんだ」

「…ごめん、いろいろと期待を裏切るようなことばかり言つて」

「いいよ。最初に会つた時、自分には靈感が一切ないし幽霊も妖怪も信じていないって常葉は公言していたもんね。陰陽師の末裔つてのは肩書きだけで、常葉はごく普通の人だってことをあたしもちゃんとわかつてなかったから」

コンロの火を消すと僕はしばし間を置いて、ポットの中のお湯がコーヒーを抽出する適温まで水温が下がるのを待つ。その間、僕と蘇芳の間で互いの肩書きに関して思い違いがあつたことを悔いる会

話が交わされた。

「常葉くん、もうお湯を注いでもいいんじゃないかしら？」

「あ、はい」

会話が途切れて僕と蘇芳が黙り込んでいると、丹さんが間を取り繕うようにドリツパーにお湯を注ぐ頃合いだと教えてくれる。僕はコンロの上からポットを上げると、フィルターの中心に空けた窪みにお湯を注入し始めた。

お湯を注がれると粉末状になったコーヒー豆がフィルターの中で膨らんでいく。まんべんなくお湯が浸透し、ドリツパーの口ぎりぎりまでコーヒー豆が広がると僕は一度お湯を注ぐのを中断してしばらくコーヒーを蒸らすことにした。

次第にフィルターに溜まったお湯が抽出されてコーヒーになっていき、ドリツパーの下に置かれたサーバーの中に琥珀色の液体が芳ばしい香りを立てて溜まっていく。

「あのさ、蘇芳って赤っぱい色のことだっけ？」

「赤というよりは紫に近い暗い色かな、それがどうしたの？」

「特別どうって訳じゃないけど、エレガントな感じの名前だなんて思っただけ」

「着物の襲かさねの組み合わせにもあるし、お母さんと忠将ただまさもあたしに高貴な美しさを持ってほしいと思って考えてくれたみたいよ」

「2人とも拘りと願いを込めて君の名前を考えたんだね」

「名前をちゃんと考えてくれただけじゃないわ、お母さんがあたしを産んですぐ死んじゃった分まで忠将は一生懸命あたしのことを育ててくれた。あんないいお父さん、そうそっぴいじゃないわよ」

再度ドリッパーにお湯が注げそうになるまでコーヒー豆が萎むのを待っている間、盗み見た彼女の顔からその名前を連想したことがきっかけで、僕らの会話は自然と弾んでいく。蘇芳は自信ありげな様子で、自分の育ての親である存在のことを語った。

「蘇芳って名前を考えてくれた忠将さんのことを、君は本当に好きみたいだね」

「うん、今は離れ離れになっているけどあたしは忠将のことが大好き。あ、もちろん戸籍上の父親である斎^{いつき}さんにもいっぱいお世話になっているし、感謝してるよ。そんなに多くの父親を知っている訳じゃないけど、忠将と同格にできるのは斎さんくらいだね」

年頃の娘にしては珍しく蘇芳は父親に当たらしい忠将さんへの好意を素直に認める。それでは現在の戸籍上の父親のことは嫌いなのかと丹さんが寂しげな顔を浮かべるのに気付くと、蘇芳は慌てて丹さんの実父で自分の義父への感謝の気持ちを示した。

そうしているうちにフィルターの中で萎んだコーヒー豆の中に、僕はお湯を再び注入する。一度目よりは大人しい膨らみ方をしたコーヒー豆にお湯を注ぎ終えると、僕はカップを温めるために注いでおいたカップの中のお湯を捨てて給仕する準備を整える。

「お待たせしました」

サーバーに充分な量のコーヒーが溜まると僕はドリッパーを外して、コーヒーカップに出来上がったコーヒーを移し変える。ビールとは違って、カップの淵いっぱいになみなみと注ぐのはエレガントではなく七分目くらいの高さに留めておく。

ソーサーにコーヒーを注いだカップを置き、スプーンをソーサーの上に添えるとカウンター越しに蘇芳の前に完成したコーヒーを置いた。仕上げにミルクピッチャーに入ったコーヒーフレッシュをソーサーの脇に並べて配膳終了。

「…いただきます」

小声でそう呟いてから蘇芳はカップを持ち上げる。売り物として初めて淹れたコーヒーに蘇芳が口をつけるのを僕は固唾を飲んで見守る。

先ほどのように悪し様に扱き下ろすことはないだろうけど、今の僕らの関係はお客様と店の店員だ。シビアな意見を突きつけられても、僕に文句を言う資格はない。

「苦…まこねえやクーくんが淹れるのよりも味が濃いよ」

「う、ごめん……」

「ごめんじゃなくて申し訳ありませんでした。でも眠気覚ましにはちょうどいいし、今日はこれで許してあげる。次はもっと上手いれなさいよ」

蘇芳が眉間に皺を刻んで丹さんや来栖さんと違う味になってしま

ったと言うと、失敗してしまったと僕は肩を落とす。しかし機嫌を持ち直したらしい蘇芳は、幾分味が濃くなったコーヒーを寛容に受け容れてくれた。

「わかりました、今度は満足してもらえそうなコーヒーを淹れます」

「今度は期待を裏切らないでよね、新人のバイトさん？」

「はい、必ず期待に応えてみせます」

蘇芳は挑戦的な眼差しで僕の顔を見上げてきた後、アーモンド形の目を細めて世話の焼ける子どもに向けるような微笑みを浮かべる。そんな態度をされても僕は不思議と蘇芳に対して生意気とか居丈高という感情は抱かずに、素直に彼女の笑みを可愛らしいと感じて笑い返した。

蘇芳は僕が自分の姉の店でバイトすることを容認してくれたらしく、どうにか亀裂の入った関係の修復は出来たようだとは僕は一安心した。

Working 了

9、Working（後書き）

ギスギスした雰囲気になった3杯目ですが、どうにか常葉と蘇芳の決定的な離別は回避することができました。

3杯目のエピソードまでで導入部としての段落はつき、4杯目からは少しずつ物語を展開させていこうと考えております。

常連客ではなくバイトに鞍替えした常葉は店を取り巻く人々とどう関わっていくのか、蘇芳はいつ復学するのかなどに注目しながら今後もお楽しみください。

10、G a r n i s h（前書き）

第1幕のまとめ的な閑話です。1〜3杯目に登場したキャラクターとその類縁者の総括をして、第2幕の展開に繋げるためのインタバルです。

人物相関図の整理にお読みいただければ幸いです。

10、Garnish

僕がバイトしている店は御門^{みかど}市南部にある住宅地の中にひっそりと建っている。決して提供する料理の味やサービスの質も低くはないこの店で万年閑古鳥が鳴いている一因に、軒を連ねる民家の間にこの店があまりにも自然に溶け込んでしまっていることがあると個人的に考えている。

住宅地の家々の中に埋没するようにして店を構えている喫茶店ラング・ド・シャは慎ましかに、辛辣な表現をすれば商売っ気がなく営業を続けている。

集客の見込める土日祝日を基本に人手が要りそうな時だけ頼まれるラング・ド・シャでのバイトはそれほど忙しいものではなく、憚らずに言えばもう少し働かなければ罰が当たるのではないかというくらい暇な仕事だった。

今も日曜の昼下がりだというのに店内には顔馴染みの客が一組しか入っておらず、その客も我が物顔でテーブルに陣取って話し込んでいるばかりで一向に注文をする気配がなかった。

清掃は30分ほど前に済ませたばかりの上、開店してから今日はまだ一度も注文が入っていないために食器棚や冷蔵庫の中は整然としており、当然厨房のゴミ箱には塵一つ入っていないのでゴミ出しの必要すらない。

柔らかな日差しが差し込み程よく空調の利いている店内で何もすることがないせいで僕は眠気を感じた。しかしバイト代は安いとはいえ、一応お金をもらって仕事しているのだからどんなに暇でも気

を緩めてはいけないと自分に言い聞かせた矢先、僕の隣から気の抜けた欠伸が聞こえてきた。

「そんなに大きな欠伸をしないでくださいよ、丹さん^{まこ}」

「ごめん常葉^{とぎわ}くん、今お客さんはあの子たちしかいないからいいかなって思っただけど……」

「…この店の主人は丹さんがそう思うのなら、バイトの僕がとやかくいう筋合いはありませんよ」

ラング・ド・シャの女主人をしている丹さんが茶目っ気のある態度で悪びれてくると、僕は暢気な雇い主をこれ以上諷める気を失くした。

丹さんは二十代半ばで小さくてもお店の経営者でもあるのに、年頃の女の子のような恥じらいをよく見せる。年甲斐もなく頼りないと言ってもいいんだろうけど、それを棚上げにしているような甘えは感じられないし、丹さんの不器用だけど誠実な人柄が表れているような不思議と嫌な感じはしない。

今みたいに店長として至らない点を見ても、丹さんの少し困ったような笑みを見る度に僕は毒気を抜かれてそれほど彼女のことを責められなかった。

「すみません、オーダーお願いします」

「はい、今お伺いします」

唯一テーブルに着いている客たちがようやく注文するようになる

と、丹さんは伝票を持って注文を聞きに行く。

あの客たちのことだから多分ソフトドリンクを注文くるだろうし、製氷機の氷を減らすいい機会だ。あるいはケーキと一緒に温かい飲み物を頼んでくるかもしれない。そうなれば最近気になっているケーキの売れ残りも防ぎやすくなるからそれでもいい。

客から注文を聞いて丹さんがキッチンに戻ってくるまでの間、そんなことを考えながら次の作業を想定していると入り口のドアが開いて店内に入ってくる人影があった。

「いらつしゃいませ…あ、来栖^{くし}さん」

「お帰り…クーくんその傷どうしたの!？」

新しい来客かと思って出迎えようとしたが、中に入ってきたのは古株のキッチンスタッフ来栖さんだった。大腿で奥に向かっていく来栖さんを丹さんは愛想よく出迎えるが、頭1つ分高い位置にある彼の顔を見て彼女は驚きの声をあげる。

ガラス戸から差し込んでくる逆光が強烈で見落としてしまったが、来栖さんの左頬は擦り剥けて血で汚れていた。店に戻ってくるまでに血止めをしたようだが、傷口からは未だに血がじくじくと滲んでいる。

190cm近い長身で体格もよく陰影を濃く刻む彫りの深い顔立ちをしている来栖さんがそんな風に顔を負傷していると、俄かには近寄りがたい異様な凄味を感じずにはいられなかった。

「仕事先でちょっと、な」

「すぐ手当てしなきゃ！」

来栖さんは怪我をした経緯を適当にはぐらかそうとするが、丹さんは彼の左頬の傷を不安げに見上げると彼の腕を取って店の奥にある居住スペースへと引つ張っていく。奥の壁に設置された扉を押し開けると、丹さんに手を引かれたまま来栖さんはその向こうへと消えていった。

「…切島^{きりしま}さん、来栖さんってこの店以外にどんな仕事をしているの？」

「んーちよつと説明しにくい仕事なんだよねー」

「説明しにくいって…やっぱり人に言えないような悪いことしているの？」

「ううん、クーくんが他所でやっている仕事は悪いことじゃないし、むしろみんなのためになることじゃないかな」

「…結局来栖さんは何の仕事をしているの？」

「まあ、平たく言えばエクソシストかな」

来栖さんの顔の怪我を見て、髪を短く切り揃えてボーイッシュな印象を受ける中学生くらいの若い女性客が声を潜めて、彼がこの店の他にしている仕事の内容を向かいに座る客に訊ねる。

質問された背中に届く髪を1本の三つ編みに束ねた中学生くらいの少女は、当初来栖さんがやっている仕事への言及を避けようとする。

しかし来栖さんが悪事を犯しているのではないかと質問をした客が疑念を抱くとその弁護のため、彼がこの店以外で行っている仕事の内容を打ち明けた。

「エクソシスト…本当にそんなことしている人がいるんだ」

「うん、御門みたいに大きくて歴史のある街にはエクソシストじゃなきゃ解決できない問題が頻繁に起こるし、エクソシストも副業として成り立つ訳。ま、ウチに関して言えばクーくんがエクソシストとして稼ぐ方が、本業であるこの店で働くよりもずっと儲かるんだけど」

「そ、そうなんだ……」

電波なことを囁く三つ編みの少女に相槌を打って、話を聞いてやるうという姿勢を保てるショートカットの少女の度量に僕は密かに脱帽した。いつ愛想をつかされてもおかしくないのにこうして辛抱強く付き合ってくれているのだから、その厚意に応えて学校に行くべきだと僕は三つ編みの少女を非難の眼差しで一瞥する。

「ねー常葉、まこねえ伝票持ったまま行っちゃったから、もう一回注文聞きに来てよ」

「メニューの準備をするのは丹さんが戻ってきてからでもいいだろ？ どうせ閉店まで居座るつもりなんだろうから少し気長に待つくらいいの気遣いはしなよ」

「吸血鬼のまこねえが血を見たんだから、血の渴きを抑えられる訳ないじゃない。クーくんの血を味わってまこねえの疼きが納まるのを待ったら20分はかかるよ。身内のあたしはともかくミチルをそ

んなに待たせるのはお店として失礼じゃない？」

「…分かったよ、注文は何？」

僕と目が合うと、三つ編みの少女は注文を書いた伝票を持ったまま来栖さんの治療に行ってしまった丹さんの代わりに改めて注文を取りに来るよう促してくる。丹さんが吸血鬼で来栖さんの血を飲むという戯言はともかく、注文を聞いた丹さんいつ戻ってくるかわからない状況では注文を聞き直した方が無難というのは妥当であったので、僕はしぶしぶ注文を取りに向かった。

「あたしはクランベリーシェイクとチーズトースト、ミチルはミルクレープとホットの紅茶にレモンをつけて」

「カシコマリマシタ」

「なによ、その事務的な返事。お客にはもっと愛想よくしなさいよ」

「モウシワケアリマセン」

キッチンを出てわざわざ注文を聞きに来た僕に、三つ編みの少女は注文を済ませると今度は文句を言ってくる。僕以上にこの店に深く関わっているくせに客として振舞うなど言い返したかったが、ここは堪えて大人しく相手のイチヤモンを聞き流すことに徹する。

「やっぱりさ、サービス業は笑顔と愛想が一番よね。常葉にはそれが不足していると思わない？」

「切島さんと上鳥羽^{かみとは}さんは仲良いんだし、普通のお客さんと同じように接するのは難しいんじゃないかな？」

「そんなの言い訳よ、友達だろうが恋人だろうが勤務中にお店に来たらお客様としてもてなすのが礼儀ってモンでしょ」

癪に障る三つ編みの少女の偉そうに垂れ流す口上を掻き消すため、僕はシェイクを作るために冷凍のクランベリーと牛乳を入れたミキサーのスイッチを点けるといつもよりも長めに攪拌させた。

初めは揺り潰されていたクランベリーが悲鳴をあげているような不協和音が聞こえなくなり、モーターの規則的な回転音しか聞こえなくなると僕はミキサーのスイッチを切って攪拌された半固形状の内容物を氷の入ったグラスに注ぐ。

「こんにちは」

オープンに入れたトーストが焼きあがるまであと1分少々、この間に紅茶とミルクレープの用意を済ませておこうと考えていると店のドアが開き朗らかな女性の声に続いて2人組の男女が入店してきた。

「いらっしゃいませ」

「そんなに他人行儀にならなくてもいいのよ常葉ちゃん。忙しい勉強の合間を縫ってアルバイトをしているなんて偉いわ」

「…まだ受験は先のことですし、そんなに大変ってことはないですよ。空いている席にご自由におかけください」

入店してきた眼鏡をかけた丸顔の女性、天満^{てんま}さんと僕は顔見知りであり、彼女は肩肘張らずに接する許可をしてくれる。天満さんか

らいただいた労いの言葉に僕は謙遜すると、内心かなり鬱陶しかつたので早く奥に行くように席を勧めた。

「窓側の席でいいよね、雪人^{ゆきこ}？」

「ああ、日差しが差し込んで温かいだろうし」

「わたしと雪人の仲睦まじい姿を見れば、通りを行く人もきつと温かい気持ちになれると思うわ」

「…やっぱり奥の席にしよう」

天満さんが通りに面した窓際の席を選ぶと、連れの男性は陽気がいいので初めは快く了承する。しかし通行人に自分たちの姿を見せつけようとしている天満さんの意図を知ると、彼は彼女の手を引いて三つ編みの少女たちの後ろの席に座った。

「もう、相変わらず雪人はシャイなんだから。でもそういうところが可愛いよね」

「ラブラブですね、カミオカ先生とカンナさん」

「切島さんと柊野^{ついでの}さん……」

「カミオカ先生がここでミチルと話をするようにって言ったんだから、あたしたちがいることにいちいち驚かないでよ」

天満さんと連れの男性の仲を冷やかされて、彼は自分たちの隣の席に三つ編みの少女とショートカットの友人柊野さんがいることに気づいたらしい。休日の喫茶店で教え子に居合わせたことに彼は驚

くが、三つ編みの少女は相変わらず生意気な口を利く。

「へえ、蘇^{すおつ}芳ちゃんが雪人に勉強教わっているんだ。おまけに雪人の弟の常葉ちゃんが蘇^{すおつ}芳ちゃんのお姉さんの丹のお店でバイトしているし、世の中って狭いね」

「ホントですよ。こんなに行く先々の人がつながっているんじゃない、人間関係に広がりが出て面白くありません」

天満さんが愉快そうな顔を浮かべて呟いた一言に、三つ編みの少女蘇^{すおつ}芳は皮肉めいた表情で溜息をついた。そんなに閉鎖的な人間関係が嫌ならちゃんと学校行って、柊野さん以外のクラスメイトと関わってこいよ……

しかし遺憾ながら世の中が狭いということには僕も2人と同感である。そしてそう感じるからこそ、友人の丹さんが主人をしており恋人の弟である僕がバイトしているラング・ド・シャでお茶を飲むのを天満さんには遠慮して欲しいと切に思う。

天満さんと兄貴が席に着くまでのやり取りに気を取られていると、入り口のドアにかけられたベルが鳴ってまた客が入店してくる。

「いらっしやいませ……」

「あゝお腹空いた、適当になんか作ってよ…あれ、姉さんは？」

「丹さんは怪我して帰ってきた来栖さんの手当てを奥でしていますよ」

「家に帰ってこられる程度の怪我なら自分で処置させりゃいいのよ、

ホント姉さんはクーくんに甘いんだから……常葉、とりあえずスコーンとコーヒーちょうだい。スコーンはちゃんと温めて、よく泡立ったクリームをつけるのよ」

しかし来店してきたのはまた顔見知りの人物で、丹さんの妹であり蘇芳の姉の大学生の葵さん^{あおい}だった。葵さんは兄貴たちが避けた窓際の席に移動しながら注文をすると大仰な態度で椅子に腰を下ろし、向かいの席に颯爽と翻していた赤いレザージャケットを無造作に投げ出した。

「常葉ちゃん、オーダーいいかしら？」

天満さんが猫撫で声で注文を取りに来るように僕を呼ぶ。いつもは注文を決めるまでにやたらと時間をかけるから先に蘇芳たちのテーブルにメニューを出してから注文を取りにいかうと思っていたのに、今日はやけに早く決めたせいで蘇芳たちに出すメニューもまだトレイに乗せ終わってもいなかった。

「ちょっと待っててください、すぐお伺いします！」

「常葉、あたしのシェイクとチーズトーストまだ？」

「今持つてくよ！」

少々乱雑な積み方になってしまったが、蘇芳と柊野さんの頼んだメニューを乗せたトレイを抱えて彼女たちのテーブルに配膳しに向かう。

「グズグズしてないで早くコーヒーとスコーン持つてきなさいよ。これ以上血糖値が下がったら脳の働きが鈍っちゃうわ！」

「す、すみません…少々お待ち下さい」

蘇芳と柊野さんの前にそれぞれ注文した品を並べていると、窓際のテーブルから葵さんの罵声が飛んできた。元々気性が激しい人だけど、お腹が空いているとその性質がより顕著になってしまうことをバイトの経験を通して僕は知っている。あまりメニューを出すのに時間がかかって葵さんの機嫌を損ねると、面倒なことになりかねない。

「常葉、俺たちのオーダーは聞かないのか？」

兄貴と天満さんには悪いけど、ここは葵さんの怒りを宥めるため彼女にメニューを出すことを優先しようとしてキッチンに戻るうとする僕を兄貴が呼び止める。

…兄貴、どうして間の悪いことに関してはタイミングが絶妙なんだ？

「ちょ、ちょっと待っててくれないか……？」

「常葉ちゃん、わたし仕事明けでお腹減ってるんだけど？」

「この後ゼミで研究会があるからのんびりしている暇がないの、さっさと注文したもの出さない！」

兄貴と天満さんにもう少し待ってもらえるように懇願する目を向けるが、ラジオ局の仕事明けでそのままここにやってきたらしい天満さんの眼鏡の奥の目は笑っていない。

天満さんの剣幕に気圧されて注文を聞くくらいすぐに終わるのだ

からそれを済ませた後に葵さんの注文の品の準備をしようとする、葵さんがかなり苛立った様子でメニューの配膳を急かしてきた。

「あーもう見てもらえないわ。常葉、カンナさんたちの注文はあたしがつてあげるからあんたはあおいねえの頼んだものを用意してあげて。このまま放っておいたら、あおいねえがお店で暴れだしそうなもの」

アクの強い年上の女性たちに睨まれてその場に射竦められてしまった僕を見かねて、蘇芳が仕事の手伝いを申し出てくれた。蘇芳は椅子から立ち上がると、兄貴たちのテーブルの横に立って注文を聞くとする。

「失礼なこと言わないで蘇芳、大人のアタシがそんなことする訳ないじゃない！」

「お腹の空いている時のあおいねえは、血に飢えている吸血鬼よりも凶暴なんだからそんなのアテにならないよ」

「ちょっと蘇芳！」

「お客様、お決まりのご注文をお伺いいたします」

キッチンに戻ってスコーンをオーブンで温め直し、冷蔵庫からスコーンに添える生クリームを器に移しつつ泡立ち具合を僕が確かめていると、中学生の妹の軽口に大学生の姉がムキになって反論している喧騒が聞こえてくる。

確か蘇芳と葵さんは8つ歳が離れていたはずだが、普段澄ました様子で居丈高に振舞っている葵さんが蘇芳と喧嘩している姿は僕ら

とそう歳の変わらない、あるいは年下の女の子のように思えた。感情を剥き出しにして憤る姉を尻目に、蘇芳は素知らぬ顔で天満さんと兄貴の注文を聞いていた。

蘇芳に姉の怒りの矛先を自分に向ける意図があつたのかどうかは分からないけれど、とにかく葵さんの注意が彼女に集中したことで僕は手際よくメニューを配膳する用意を済ますことができた。

「カンナさんはカレーセットでコーヒーは食後にフレッシュと砂糖をつけて出して。カミオカ先生はクラブハウスサンドセットを頼んだわ、やっぱりコーヒーは食後に欲しいそうだけど何もつけずにブラックのままお願い」

蘇芳が聞いてきてくれた兄貴たちの注文をカウンター越しに述べてくるのを、僕は伝票にペンを走らせて書き留める。

「あおいねえのオーダーの用意できてるみたいだし、あたしが持つてつてあげるよ」

蘇芳はカウンターに僕が乗せた焼きあがったスコーンとコーヒーの乗った皿を手にとると、葵さんのテーブルに運ぶと申し出てくれた。

「ありがとう、助かったよ」

「お礼はあたしとミチルのオーダーをタダにしてくれるのでいいよ」
なるほど、気前よく協力してくれたのはそういうことだったのか……

「ちょっと待て、それはぼったくりだ」

「お客のあたしが手伝ってあげたんだよ、それくらいのサービスはしなさいよ」

たったこれだけのことで僕は蘇芳に2000円近くも支払う勘定になり、報酬として不当なほど割高だと僕は抗議する。しかし蘇芳は僕の訴えを無視して、スコーンとコーヒーの乗ったトレイを抱えて窓際の席へと行ってしまふ。

「やっと注文したものが出てきたわね。姉さんといい常葉といい、ここのスタッフは他所のお店じゃ使い物にならないグズばかりよ」

「ふーん、せっかく運んできてあげたのにそういうこと言うんだ。だったらお勘定は結構ですのでお客様、お引取りください」

メニューを持ってテーブルの前にやってきた蘇芳を一瞥すると、葵さんは僕だけじゃなくて自分のお姉さんである丹さんのことも罵る。しかし蘇芳は葵さんの漂わせる険悪な空気にも物怖じせずに、一度テーブルの上に並べた食器を回収しようと手を伸ばした。

「べ、別に食べないとは言っていないわよ！」

一口もつけないまま下げられそうになる食器を葵さんは咄嗟に庇う。

「無理に食べていただかなくてもよろしいんですよ、鈍臭い人間の作った料理なんてお客様の口には合わないんじゃないですか？」

「…配膳の手際は悪くても、姉さんの作った料理は美味しいわ」

葵さんはお姉さんの丹さんの料理が食べたくてこの店にやってきたことが照れ臭そうな顔を見ると、窓の外に視線を逸らす。僕に背中を向けているので蘇芳の表情は分からなかったが、屈折した態度を改めて本音を吐露する姉の態度を楽しんでいるのは間違いなさそうだ。

「最初から素直にまこねえの料理が食べたいって言えばいいのに、どうしてあおいねえは余計な憎まれ口を利いて相手の気を悪くさせるのかな？」

「う、うるさいわね…用が済んだらさっさと友達の所に帰りなさい。アンタなんかに付き合ってくれる数少ない友達は大事にしなさいよ！」

ようやく食事でありつけるようになった葵さんは、蘇芳が僕の手伝いをしていることで友達の柊野さんを待たせていることを注意する。キツくて捻くれた性格をしているけど、なんだかんだ言って葵さんは妹の蘇芳を大事にしているんだよね。

「わかってるよ、あおいねえ。そうだ、さっきの注文は常葉が奢りになるからもう一品何かオーダーしようっと」

「おい、誰も奢るとは言っていないぞ！」

「無駄口利いている暇があるなら手を動かす。カンナさんとカミオカ先生もお腹をすかせているんだから待たせちゃ駄目だよ？」

社会人だから葵さんみたいに喚きたてることはしないし、身内の兄貴と身内になるかもしれない天満さんだけど、お客さんとして来ているからには注文された品を出すのを長引かせてはいけない。

蘇芳に言われた通りなのは癪だけどお客が注文の品を待っている以上、彼女と言い合いをしている暇など僕にはなかった。

「お待たせしました」

「ありがとう。蘇芳ちゃんは年下なのに常葉ちゃんのことをしっかりと尻に敷いて手綱を取っているのね。わたしも見習わなくちゃ」

「見習わなくていいです、それにあいつの尻にも敷かれていません」

準備できたメニューを配膳していると、天満さんが蘇芳の横暴さに感心しているようなことを口走る。天満さんは僕と蘇芳の関係を甚だしく誤解しているし、あなたは今でも充分に兄貴の手綱を握っていますよ……

「照れちゃって、やっぱり高校生は初々しいな。わたしたちも最初はお互いの距離を掴みにくかったよね、雪人？」

「そう言えなくもない、かな……？」

兄貴は天満さんに気を使って彼女の思い出話に口裏を合わせた。距離が掴みにくかったのは本当だろうけど、天満さんは学生時代から兄貴に積極的なアプローチを繰り返していて、兄貴は距離を置くことも出来ずに結局天満さんが密着された状態に慣れてしまったというのが実情だった。

「…ごゆっくりどうぞ」

兄貴と天満さんの語らいに水を差しては悪いと感じて、僕は食器

をテーブルに並べ終わるとキッチンに戻っていく。キッチンに戻って調理に使った道具を片付けながら、兄貴たちのテーブルを一瞥するとそれなりに楽しく会話を弾ませているようだった。

強引な所はいくらか、いや多分にあるけれど天満さんが兄貴を好きな気持ちに嘘はないと思う。兄貴も気圧されてはいるけれど、天満さんから寄せられている想いに正面から応えようとしている。だから今も2人はこうして交際を続けているんだろう。

厚かましい所は苦手だし、いつまでも子ども扱いされる点には辟易しているけれど、僕自身天満さんのことは嫌いじゃない。明るくて活発な性格をしているし、ちよつとぼつちやりしているけれど包容力のある魅力的な女性だと思う。実際、兄貴が不満じゃなければ天満さんが自分の義姉になっても構わない。

「彼女、か……」

もうじき高校1年も終わろうとしているけれど、未だに僕に浮いた話はない。兄貴はこの頃には天満さんと付き合い始めていたことを考えると、少し兄貴に対して負い目を感じてしまっている。

「常葉、フルーツパフェ1つ追加で」

「…前の注文も合わせて奢らないからな」

「なによケチゝ恩知らず」

こっちは奢るとは言っていないのに、蘇芳の中では手伝ってくれたことのお礼として僕が食事を奢ることが決定しているようだった。チョコパフェよりも値段の高いフルーツパフェを注文してくること

からそう考えて間違いないだろう。

追加でオーダーしてきたフルーツパフェはもちろん、先に注文した品も奢るつもりは一切なかったが、僕はパフェを作る準備に取り掛かる。

今後自分が異性と付き合うことになっても、妄想癖があり自己中心的な蘇芳のような相手だけはごめんだと、パフェを作りながら僕はしみじみ感じるのだった。

G a r n i s h 了

11、Life plan（前書き）

前回に引き続き番外編。しかも今回は主役の2人は登場せず、彼らの兄や姉世代の人物のみの登場です。

常葉視点でないちよつと大人の掛け合いをお楽しみください。

11、Life plan

夜半、その日の営業を終えた喫茶店ラング・ド・シャのフロアには2組の男女が同じテーブルを囲んでいる。

男性2人が入り口側、女性2人がその向かい側という配置で着席している各人の手元に置かれたグラスにはそれぞれ異なる酒類が注がれていた。

「乾杯！」

眼鏡をかけた豊満な肢体の女性、天満^{てんま}カンナがよく通る声で音頭を取ると、テーブルに着いている男女は互いにグラスの縁を当てて乾いた音を鳴らす。

「高校からの付き合いだけど、こうして4人で飲むのは初めてじゃない？」

「言われてみればそうだね。カンナちゃんと上鳥^{かみとは}羽くんとは学生の時に何回か飲んだことがあるけど、その時はいつもクーくんがいなかったもんね」

グラスの中のカクテルを一息に飲み干したカンナの言葉にその隣に座った比較的長身で細身の女性、切島^{きりしま}丹が相槌を打つ。

「切島さんと一緒にこの店を開く前は基本的に夜勤の仕事してたんだよな。大変だったな来栖」

「頑張った分、早めに店を開業出来たから不満はねえよ」

カンナの正面に座った眼鏡をかけた人の良さそうな青年、上鳥羽^{かみとば}雪人^{ゆきと}に労われると、彼の傍らで水割りの焼酎を舐めている彫りの深い顔立ちをした偉丈夫、来栖託人^{くるすたくと}は感極まった表情で自分が働いている店内を見回した。

「喫茶店を開くためのお金をほとんど出してくれたんだからクークンには感謝しきれないよ。月並みなことしか言えないけど、本当にありがとう」

「感謝しているのはこっちの方さ。お前が俺を雇ってくれたお陰で少しは夜の時間に余裕ができて、こうやって高校の同級生と卓を囲めるんだからな」

共同でラング・ド・シャを運営している丹と来栖は感謝の意を相手に贈りながら、互いの顔を見つめあう。

「ちょっと丹に来栖くん、久々に集まった席でいきなり2人の世界に没入しないでちょうだい。毎晩この上で惚気ているのによく飽きないわねえ」

「ご、ごめんカンナちゃん」

自分と雪人をそっちのけで惚気ている丹と来栖の間にカンナが口を挟むと、丹はせっかく自分たちの招待に応じてくれた親友の気を損ねてしまったとすぐに詫びる。

「あー丹たちが羨ましいな。そうだ雪人、わたしたちもそろそろ一緒に暮らそうよ?」

ラング・ド・シャの2階は住居区画になっており丹と来栖はそこで同棲している。彼女たちの関係を羨んだカンナが唐突に同居を持ちかけてくると、雪人は危うくビールを嘔き出しかけた。

「そろそろって言われてもなあ……お互い全然違った業種で働いているから顔も合わせにくい、逆に気まずい雰囲気になりそうじゃないか？」

「雪人は朝早くから夜遅くまで中学校に詰めっぱなしだし、わたしは局に出入りする時間が不規則だし確かに一緒に暮らしていても擦れ違いは多そうね」

「そうだろう、だったら無理に同居することはないんじゃないか？」

「でもさ、少しでも相手の顔を見られればそれだけで仕事で疲れた気持ちに張りを持たせられるんじゃない？」

雪人はカンナとの同棲に消極的だが、カンナは例え一緒にいられる時間は短くても恋人の顔を拝むことで仕事を頑張ろうと思えるのではないかと前向きな検討を呼びかける。

「そ、そうかな？」

「実際のところどうなのか、同棲してる先輩としての感想を聞かせてよ丹」

「えっと……わたしたちは仕事先も同じだから、中学校の先生をしている上鳥羽くんとラジオ局に勤めているカンナちゃんの参考にはならないんじゃないかな」

急に意見を求められて丹は驚いた様子だった。しどろもどろの回答をする丹の顔はアルコールの酔いが回ったためか、もしくはプライベートな話題に触れられた恥じらいからか頬を赤く染めている。

「状況は違ってもさ、やっぱり好きな人と寝起きと共にするってのは別々に暮らしていた時とは違った刺激があつたでしょ？」

「ううん、そういうのは特別なかつたよ」

「丹のことだから父親以外の男の人と一緒に暮らし始めた頃は緊張の連続だったんじゃないかって想像してたけど、案外冷めてるのね」

「クーくんが一緒に住むようになった時はちよつとは緊張したよ。でもその時はお父さんも葵もいたから、親戚の人がウチで寝泊りするようになったような感じだったかな」

「ちよつと待つて丹、今の言い方じゃあんたの実家に来栖くんが下宿していたみたいに聞こえるけど？」

「あれ、クーくんが高校の時からウチに下宿していたこと知らなかったっけ？」

「ええっ、それじゃあんたたち高校の頃から同棲してたの!？」

丹が素っ気無い口調で来栖とは高校の時分から彼女の实家で共同生活をしていたことを暴露すると、その事実を初めて知らされたカンは仰天する。雪人も飲みかけていたビールをむせながら丹と隣で仏頂面を僅かににやけさせている来栖のことを交互に見やった。

「うん、お店の上に住む前からクーくんとは一緒だったから特別目

新しいことはなかったの」

「そ、そうなんだ……」

色恋に関して奥手そうな丹と女性との交際に不精そうな来栖がこの店の上で暮らす随分前から同棲していた事実を知ると、雪人は適当に相槌を打ちつつ自分だけ置き去りにされているように居た堪れない様子でグラスに残ったビールを呷った。

「高校の時から付き合いでしかもその頃から同棲していて、おまけに今は一緒にお店の切り盛りをしている。もしかして今日飲みに誘ったのは2人が入籍する報告のためだったとか？」

「ち、違うよ。久々にみんなで集まれたらなあって思って連絡しただけで、それ以外に何かある訳じゃないよ」

親友の自分も予想していなかったほど丹と来栖の仲が親密だと知って、カンナは婚約の発表を内密にするために今晚自分たちを呼び出したのではないかと推測する。しかし丹は更に顔を赤くして激しく首を左右に振り、カンナの推測を否定した。

「本当かしら？ まさかあんなたち、デキてないでしょうね？」

「どうしたカンナ、もう酔っ払っているのか？ 関係がデキてなかったら同棲している訳ないだろう？」

「鈍いのは雪人よ、わたしが丹たちに訊いているのは子どもが出来てないかってことよ」

グラス1杯分のビールでほろ酔いになっている雪人は、自分より

も酒に強いカンナが今日はもう酔っ払っているのかと意外そうな顔で彼女の様子を覗う。しかしこの場にいる面子の中で一番素面の状態に近いカンナは、雪人の相変わらずの勘の悪さに呆れながら丹と来栖の間に子どもが出来てないかと問うたのだと返した。

「こ、子ども!？」

「アホか天満、結婚もしてねえのにガキを仕込む訳ねえだろ!」

丹と来栖は取り乱した様子で自分たちはまだそこまでいつてないとカンナに反論した。

「でもさー高校の時から付き合ってるのに、未だにプラトニックな関係のままではないでしょう?」

「そ、それは……」

「多分高3いや高2の終わり頃にはヤってると思うんだよね。はつきりした時期は覚えてないけれど、ある日を境に丹がオンナの顔になってたもん」

「なっ!？」

カンナに来栖との関係を言及されると丹は口ごもる。しかし高校時代の記憶を反芻しながら丹の雰囲気が変わった瞬間のことをカンナが口に出すと、雪人は丹たちが一線を越えた時期の早さをにわかに信じられずに驚く。

「カンナちゃん、気付いてたの!？」

「えっ!？」

「3年間同じクラスで毎日顔を合わせていたからね、何となくそんな気はしてたんだ。雪人は2、3年で来栖くんと一緒にクラスだったのに来栖くんがどこか変わったように感じなかったの?」

「い、いや…特に来栖が変わったようには思えなかったけど……」

「割と話してたけど丹と天満ほど親しくはなかったから気付かなくても無理はないさ。でもよ上鳥羽、久々に会った時にあんたがオトコの顔になったのに俺は気付いてたぜ?」

毎日顔を合わせて親友の間柄であつたカンナが丹の変化に気付いたのと同様に、常に行動を共にしていた沢ではない雪人が自分の変化に気付かなくても無理はないと来栖は彼の弁護をする。しかし雪人が男になったことを自分は見抜いていたと来栖は口の端を吊り上げて彼に流し目を向けた。

「どうせ高校の時に悪ぶってたあんたは、丹とやる前に風俗か何かで筆おろしはしてたんでしょ。清く正しい青春を送っていた雪人とあなたを一緒にしないで!」

「…最近少しは風当たりが緩くなったと思っていたが、相変わらず俺に対する言葉は手厳しいな天満」

茹蛸のように顔を赤らめて口を噤んでいる雪人に代わって、カンナは少々節操のないことを交えながら来栖を罵倒する。高校時代、自分のことを不良と毛嫌いしていたカンナの暴言に曝されて来栖は苦笑しつつも懐かしさを覚えているようだった。

「こんな元ヤンに初めてを捧げたなんて丹が可哀想だわ……」

「そんなことないよ、クーくんは初めから優しくしてくれているよ」

「…丹、あんたホント天然ね」

丹の初めての相手が悪名名高い不良だった来栖であることをカンナは嘆くが、丹は自然な口調で大胆な発言をする。素で赤裸々なことを口走る丹をカンナはある種の尊敬の籠もった眼差しで見つめ、向かいの席に並ぶ男たちは揃って恥ずかしそうに顔を赤らめるといいうぶな反応を見せた。

「できるならいつか、赤ちゃんが欲しいなあ」

「丹!？」

「目が据わっちゃってる、もうこの子できあがってるよ……」

来栖が自分をどのように扱っているのかということに続いて、丹は子どもを持ちたいという願望を語り始める。再びの丹の爆弾発言に一同の視線は彼女に集中し、カンナはすっかり丹が酒に吞まれてしまっていると判断した。

「水持ってくる。天満、少しの間丹のことを頼む」

「分かった。そっぴや丹、あんた全然飲めなかったね」

来栖は席を立って店のキッチンから丹の酔いを醒ますための水を持ってこようとする。来栖に丹の介抱を頼まれたカンナは、丹の手から梅酒が半分ほど残ったグラスをもぎ取ると、親友が酒に滅法弱

いことを失念していることを悔やんだ。

「クーくんは、クーくんは赤ちゃん欲しくないの？」

「切島さん大丈夫、酔っ払い過ぎじゃない？」

キッチンに向かおうとする来栖の腕を掴むと、丹は呂律の回らなくなってきたたどたどしい口調で来栖に子どもが欲しくないかと訊ねて来る。明らかに平時と様子が異なっている丹のことを雪人は不安そうな顔で案じた。

「どうなのクーくん、ねえ答えてよ？」

「俺は欲しくない」

丹はカンナの体に寄りかかって上目遣いで来栖のことを見つめながら、彼の腕を揺すって自分の質問に答えるように急かす。来栖は目を閉じて一呼吸置くと、きっぱりと短い返事をした。

恋人の丹が子どもを望んでいるのと真っ向から対立する回答を来栖がしたのを聞いて、カンナも雪人も表情を強張らせた。無言のまま視線を交錯させる丹と来栖の間に不穏な空気が漂い始める。

「クーくんはわたしのこと好きじゃないの、だからわたしの子どもが欲しくないの？」

「そんな訳あるか、お前のことは誰よりも愛してるよ」

「だったらどうして？」

「子どもが生まれたら、今は一極集中的に注いでもらえる愛情が減っちゃうからだよ」

「うわ、サイテー……」

母親となった丹が子どもに愛情を注ぐせいで自分に向けられる愛情が減ってしまうことが嫌だという来栖の発言に対し、カンナはあからさまに不快感を見せる。

「でも家業を継がせるためには子どもが必要なんだよな。だから感情的には欲しくないけど、家業のためにはいずれ子どもを持たなきゃいけないんだよな」

「なんて自己中な…やっぱりサイテーの男ね」

「カンナ、そう思っても切島さんと来栖の話を邪魔しちゃ駄目だよ」

家業の後継者を作るためには子どもを持つ必要があるという来栖の言葉にカンナは再び嫌悪感を抱くが、他人が横槍を出さずに当人同士にしっかりと話し合うべきだと雪人は彼女を宥める。

「わたしはクーくんと反対。感情的には子どもが欲しいけど、生まれてきた子にクーくんの仕事を継いで欲しくない。クーくんがご先祖様から受け継いだ役割がどんなに大変なものかわたしも知っている、だからそんな辛い思いはして欲しくない」

「丹……」

酩酊している割に冷静な意見を丹が返してくると、来栖は恋人とどれだけ時を重ねても気持ちの擦れ違いは避けられないことを認識

する。

「けど今はこの街のみんなのために頑張っているクーくんを一番に支えてあげたい。わたしの好きだって気持ちを支えになるのなら、全部クーくんにあげるよ」

丹は来栖の腕を掴んでいた手をずらして彼の手を握ると、そのまま立ち上がって来栖と視線を合わせようとする。丹は上背が170cmほどあり決して小柄ではなかったが、それでも190cm近くある来栖のことを見上げなければならなかった。

丹は少々上目遣いで来栖に微笑みかけると、彼の胸に倒れこんでいく。

「丹!？」

力なく来栖の腕に抱かれて支えられている丹の容態をカンナは案じ、その声はフロア中に響き渡った。

「心配するな、酔い潰れて眠っちゃったただけだ」

来栖は自分の腕の中ですよすやと寝息を立てている丹を呆れた顔で見つめて、余計な気を揉む必要がないことをカンナたちに知らせる。

「そう、よかった……」

「丹のこと、上に寝かせてくる。多分朝まで起きないだろうが勘弁してくれ」

来栖は一度膝を屈めると、丹の足と背中に通して彼女の体を軽々と持ち上げる。

「気にしないよ、それよりも丹のことよろしくね」

「ああ、しばらくの間、この店はある人たち2人の貸切だ。楽しんでくれよ」

来栖は旧友たちに語らいを楽しむといいと言い残して、丹を俗にいうお姫様だっこしながら店の奥にある扉を潜って寝室のある2階へと登っていった。

「まさか来栖くん、気前のいいこと言って丹の寝込みを襲う気じゃないわよね？」

「ねえカンナ、君はもう少し来栖に寛容になってもいいと思うんだけど？」

2階に上がったきり戻ってこない来栖が丹に狼藉を働いているのではないかと邪推するカンナを、雪人はやんわりとした態度で諷める。

「ところでさ、雪人はどうなの？」

「どうって、何が？」

「わたしとの将来のこと。どこに家を建てるかとか、子どもは何人欲しいかとか」

「そ、それは」

カナナに今後の関係の在り方を問われた途端、雪人は来栖の速やかな帰還を切に願わずにはいられなかった。

L i f e p l a n 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6025y/>

ラング・ド・シャ

2012年1月8日22時52分発行